

焼香の列 参加者約三七〇名



世田谷特攻観音

年次法要

9月23日

報特攻会

平成10年11月

第37号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

毎年の事であるが、今回も観音寺の堂宇に約五〇点の特攻隊の絵や特攻隊員の遺詠が展示された。彩管を振ったのは伊藤直之、市川国雄、松本武仁の諸氏である。

今回はそれに加えて義烈空挺隊が出撃前に書き残した遺墨一九点（但しコピー）が展示された。それらにまつわる話は次号で述べるが、ここに奥山、諏訪部両隊長のものを紹介する。



諏訪部大尉

吾頭南海の島に
暎さるも
我は頬笑玉
國に貢せし
隊長 及山大尉

花は存不
人は武ま
やうり丸銀り
桜ばふ
画

目次

世田ヶ谷特攻観音年次法要	1
八月十五日の靖国神社	3
生残り特攻隊員の心境②	6
特攻隊烈士の遺髪御遺族の許へ	13
殉義隊若杉是俊少尉の日記	14
第79振武隊佐藤新平曹長の日記	17
殉義隊隊長敦賀良一中尉のこと	20
戦没特攻隊員の我が子に与えた遺書	21
特攻隊絵巻書見発刊に因んで⑤	23
茨城県護国神社に特攻絵画展示	25
樺太真岡郵便局の殉国女性交換手	26

君が遺墨の手に取って見る
あれから五十余年
叱高き君が面影
愛する同胞の為俺は征くと
遺した言葉
親に今までの不孝を詫び
これが最後の親孝行だと書いた気持
そして、梅と我が身は散るとも後に
続かん桜花
後に続くあるを信じて征ったのに
余りにもかけ離れた今の世
この観音の胎内に
君の名は納められている
老醜の身 濟まない気持で
手を合わす



右の絵は「偕行」平成6年2月号の表紙であり、仙幼47期長沢政輝氏（号長康・日本美術家連盟会員）の染筆するもので、画伯は〈表紙によせて〉「寂光慈眼」と題し、偕行に一文を掲げている。ここにその一部を抜粋掲載させてもらおう。

昭和19年11月初旬、私たちの学校に六期上の山本卓美中尉殿が来訪、あとで判ったことだが、特攻の勤皇隊隊長として母校に訣別に來られたのである。

この夜、わが期の田中一徳君は中尉に面会し、親しく警咳に接した。手記によると、山本中尉と彼は校内の高台上に登り、月を仰ぎながら次のような会話を交わしている。

「貴様死ぬということ考えたことがあるか」／「ごく表相のことでしたら……」／「死をこわいと思ったことは……」／「しよっちゅうです。こわくなる」とそこでやめて考えを戻してしまします。自分は怯懦者ではありませんよ

うか」／「貴様ぐらいの時はそれが本当なのだろう。死をおそれるのは自然の情だぞ。死だけをとり出して考える」とこわい。しかし死は生のつながりなのだ。俺はいま朝晩仏典を読んでいる」

／「仏典をですか」／「うん、聞かせてやろう、曹洞寺の修証義というものだ——生を明らめ死を明らむるは仏家の一大事の因縁なり、ただ生死即ち涅槃と心得て生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、是の時始めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし……。人生五十年といふのは平時だ、戦時は半分二十五年、更に航空兵は二割引で二十年、俺は二十二歳ですこし生き過ぎた。

軍人の死は生命の爆発的燃焼だ、死とは生きることだ。杉本五郎中佐によれば、悠久の大義に生きるということだ。貴様も、忠の一途を馬車馬のようにまっしぐらに励め」

中尉が去ってから約一カ月、12月6日に「山本卓美中尉レイテ沖に出撃」の報が私たちの胸に貫いた。

あの日から早くも戦後五十年——「夫れ人生を觀すれば、泡沫夢幻の五十年、死すべき時の至りなば、何惜しからむこの命」山本卓美中尉は朗々とこれを歌い、田中一徳君に聴かせたという。山本中尉がその死生觀の原典に

『修証義』を選び、「一大事因縁を究盡」すること、すなわち修（修行）と証（さと）りのなかで死に就かれた二十歳の達觀を、私は瞻仰してやまないのである。

「いのちは光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし」とは『修証義』——苛酷な戦線に我が身を捧げた先輩たちは、それぞれ苦惱の果てに死生觀を見出し、永遠の紅顔のいのちを得られたことであろう。日本民族の中に、顕彰のまことを伝えて行きたいものである。

前庭の湧水地にブロンズの観音立像が影をおとす。法隆寺の晩作「夢違觀音」を摸したものの、拝めば悪夢も古夢に変わるといふ。無常の流れに流され、流されたついた六十五歳のいま、過ぎし悪夢の日、吉夢の日がこもこも蘇る。むろん夢を違えるすべはなく、またその気持もない。

春の陽が降り注ぎ、観音堂は寂光に包まれ、神も仏も和融一如、先輩たちの慈愛の聲が胸に逼る。

八月十五日靖国神社

第23回全国戦没者慰霊大祭

田中賢一

英霊にこたえる会の主催するこの大祭は、例年通り行われ、参列者約70名拜殿に溢れるばかりだった。

拓殖大学吹奏楽部の国歌吹奏で式典が始まる。堀江正夫会長の捧げた祭文のうち、特に我々の胸に深く響いた箇所は次の通りである。

さて、これらの尊い殉国の御霊の犠牲に對して、祖国日本の今日の姿は如何でありましょうか。戦後ひたすらに物質的追求に走り、その成果を謳歌した経済的繁栄も、最近大きく崩壊後退し、加うるに、戦後広く深く国民の各層に浸透した、誤れる白虐、反口史観は、国民から光輝ある日本人としての誇りを奪い、道義地に落ちて、今や正に戦後最大の国家存亡の危機に立たされているのであります。誠に慙愧にたえません。

しかしながら、この危機に際会し、これを怪視するに忍びず、心ある多くの国民が、眞の日本人の心の回生を心から願ひ、そのための活動が、逐次活発化しつつあることは、せめてもの救いでありまして、東京裁判終結五十年に当る本年、極東国際軍事裁判を題材とし、東條英機元首相にスポットを当てた映画「プライド」が上映後、日を経ずして観客数が百万を超えたことは、このような新た

な国民の風潮を示すものでありましょう。

このことはまた、先般行われた参議院議員選挙で、政権党である自由民主党が敗北したことに合ひ通じていると思ひます。

すなわち、自由民主党の惨敗は、単に経済政策の失敗だけでなく、総理が靖国神社の公式参拝を敢て実施しようとせず、国家存立の基本を忘却して省みない、その政治姿勢に對する、国民の怒りと反発が、あのような結果をもたらしたものと思われなりません。

(中略)

そして、本年もまた、先帝陛下が昭和六十一年八月十五日にお詠み遊ばされました御製を、敬々しく奉唱申し上げて祭文を終ります。

この年のこの日にもまた 靖国の
みやしろのことに うれいはふかし

祭文奏上に続いて仏所護念会教団合唱部の若い男女による次の歌の献樂があり、参列者の肺腑に浸みるものがあった。御遺族であらうか涙を拭う人もいた。○海ゆかば ○同期の桜 ○故郷

千葉県茂原にあるマリヤの里日曜学校

千羽鶴奉納のこと

昨年も紹介したが、本年も奉納され十四回目となる。拜殿の柱に掛け、添えられた手紙が読み上げられたが、それは参列者の琴線に触れるものだったので、全文を紹介する。

英霊にこたえる会の皆様

冬季オリンピックの日の丸飛行隊、障害を克服してのパラリンピックでの若者達の活躍！ 粉雪の舞う長野の雪空に何本かの日の丸の旗がひるがえり、日本全国が若者達に拍手を送り感動の涙に酔いしれた平成十年、誰しもが今年こそはと思つたことでしょうか。

しかし空に舞う日の丸とはうらはらに、大海を漂う日本丸は沈没直前、日本国民は船長も機関長も信じられないまま、不安と不信のなかで暑い夏を迎えました。

従来なら「英霊のみなさん、日本の平和ありがとう」の気持で一羽ずつ折つたものです、が今年はそのだけではすまされないあせりにも似た気持で「英霊のみなさん、日本の行く末をお護り下さい」の祈りをこめて折りました。

無心に折り続ける子供達の小さな指の動きを見る時、この子供達にどんな日本を托して行けるのかと思うと同時に、大和民族としての血をつぐこの子供達！ 彼らを信じて明日の日本を托して行こう！

何かあい矛盾する気持で今年の終戦記念日を迎えるようしております。

でもどんな世の中になっても英霊に對する感謝の心は、ゆらぐものではありません。

平成十年八月十五日

マリヤの里カトリック日曜学校

代表 塩崎深雪

文教の荒廢、神武以来今日より甚だしきは無い。戦後の誤った教育は多くの教育者を汚染し、教科書業者も文部省の役人も、その上に立つ政治家も骨髄まで蝕まれているかと思う現在、このような日曜学校の存在は闇夜に灯を見る思いがする。

第12回戦没者追悼中央国民集会

英霊にこたえる会と日本会議の共催によるこの集会は、参道に建てた大天幕の下で行われ、聴衆は千五百人に及んだ。

終戦の詔書玉音放送の録音を拝聴した後、英霊にこたえる会堀江会長、日本会議小田村副会長(拓大総長)が挨拶し、首相の公式参拝実現を強く訴えた。ついで各界代表の提言として、中村功(銀河高原ビル(株)社長)、ロマー・ウルピツタ(京都産業大学教授イタリヤ人)、井尻千男(拓大日本文化研究所長)が意見を述べた。それらの内容については紙面の都合で省略するが、我々よりも政府要路の者に聞かせたいものだった。

正午の時報に合せて参加者一同で黙祷し、武道館で行われている政府主催の戦没者追悼式における、天皇陛下のお言葉をラジオで拝聴した。

それに続いて声明文が朗読され、参列者全員が拍手をもって之に応えた。

その声明文の内容は

「ふりかえてみれば、戦後五十有余年、我々日本人は戦争で荒廢した国土と敗戦の虚脱感の中から祖国の再建を期して営々と努力を積み重ね、



大天幕内の国民集会 天幕外にも多勢

かつての焼土には高層ビルが林立するまでの世界有数経済大国として再生した。この平和と繁栄がここ靖国の社に鎮まる英霊の尊き功を礎として築かれたものであることを片時も忘れてはならない。"の前言で始まり、虚偽に充ちた中国系米人の「レイブ・オブ・南京」の出版や、従軍慰安婦の虚構などに触れ、「まさに反日的歴史観による世界的包囲網が着々と形成されつつあると言わざるを得ない。時あたかも本年秋には江沢民中国国家主席、金大中韓国大統領が相次いで来日する。そ

の際には、またしても過去の歴史に対する反省と謝罪の問題が浮上してくるであろう。

過去、政府は中韓両国の要求に屈して反省と謝罪を繰り返し、その度ごとに心ある国民は失望してきた。しかもそれでもなお中韓両国は満足せず、今回再びわが国に謝罪要求を突き付けようとしている。敢えて我々は政府に対して、強く要望する。この機にこれまでの自虐的な姿勢を根本的に改め、独立国家としての毅然たる態度で望みたい、と"そして、これこそが二百五十万英霊に報ゆる途であり、首相は先ず靖国神社に参拝せよと求めている。

この声明文を政府に送りつけるが、耳を傾ける気があれば、小渊首相もまだみどころがあると思うが、如何がなものか。

参道における絵画等の展示

英霊にこたえる会の会員で構成している彩管奉仕会の人達は、年に十数回参道の傍で御祭神に因む油絵の展示を行っているが、当日も亦約40点を掲げ数名の説明員を付して開催した。多くの参拝者が足を駐めて熱心に見入り、この画中に我が叔父がいた筈だと、感涙にむせぶ遺族が現れ、思わぬ奇縁が結ばれたりした。また画面の作戦について尋ねられ、説明員に遣り甲斐を感じさせることが屢々あった。

今回絵を出した人は次の通り、松本武仁、伊藤直之、市川国雄。

参拝者の群と武道館の追悼式

従来多く見かけた地方から上京した遺族会の団体は、遺族の老齢化が進み追々少なくなつたようだが、一般の参拝者は明瞭に増えている。人の群は拝殿の前に溢れ、参道一杯につながつた。特に正午の時報に合せた黙祷の直前には、少しでも神様の近くに進もうと、人の群をかき分けて進む者が目立つ。それらの人達は遺族や戦友のように御祭神に身近な人もあろうが、そうでなく戦死者の御命日というべきこの日に、報恩感謝を捧げねばならぬと出向いた人が大部と思う。神社の調査に寄れば、この日の参拝者は15万から20万に及ぶという。

政府主催の武道館における「全国戦没者追悼式」は参列者七千人である。これは割当てにより参加者がぎまがるが、天皇陛下の御臨場があるので成り立っているようなものだ。菊花に囲まれた臨時の標柱に戦死者の霊が宿るとは思えない。靖国神社に霊が籠っているのは戦死者がここに祀られると信じていたからである。もっとも、この式典の対象は市民も含めた今次大戦の戦没者全部であるので、それ相応の意義は認めよう。

新聞の報ずる総理大臣の式辞を読むと、何と非常識なことと言わざるを得ない。我々市井の者でも弔辞となれば光らず死去を悲しみ、ついで死者の業績を称えるのが当り前である。ところが今なお悲痛の思いが胸に迫り来るのを禁じ得ません”

で終わっている。そのあとは例によって近隣諸国に迷惑をかけたと、反省の言葉が続いている。このような量見では、戦場に散つた兵士の国を思う気持ちをもどくように受継いでいくのか。戦死者や戦火に斃れた人達に向かつて近隣諸国に迷惑をかけたなどというのは、無礼極まる。

今問題になっている東京都が建てようとする平和祈念館は、空襲で死んだ市民の遺族の慰霊碑建立計画を横取りしたもので、空襲容認論に立っている。即ち、空襲は日本の侵略戦争の報いだとか、東京は軍事都市だから空襲を被つたのだというものである。慰霊がとんでもない方向に走ろうとしている。武道館における首相の式辞も、これと軌を一にしている。

天皇陛下から”さきの大戦で尊い命を失つた数多くの人々とその遺族を思い深い悲しみを新たにいたします”と仰っしゃって頂けば、我々は感激する。我々の亡き戦友もそうであらうし、空襲に斃れた戦前の国民も同感であらう。ところが、近隣諸国の鼻息をうかがい靖国神社の参拝もできない総理大臣に、悲しんでもらっても、受け入れる英霊があるう筈がない。

年々増えゆく参拝者に意を強くしたが、武道館における追悼式を伝える夕刊を見て、暗澹とした気持ちを抱いたのは私だけではなからう。

(英霊にこたえる会運営委員)



正午の黙祷



拝殿前の参拝者の群

生き残り特攻隊員の心境(その二)

語り手 熊倉順策

(義烈空挺隊員)

聞き手 自衛隊空挺団隊員

二尉 小原浩信

三尉 梨木信吾

聞き手及び記事整理係

菅原道熙

全般企画 田中賢一

この対談は熊倉順策氏に新潟県中条町より来てもらい、千葉県船橋市に在る自衛隊習志野駐屯地内で、6月2日に行ったものである。対談の中にも断片的に出て来ることであるが、それを補足整理し、熊倉氏がどうして義烈空挺隊員になったか、義烈空挺隊の行動の概要、何故生き残ったか等について、冒頭に解説しておくことにする。なお、これらの事は質問者である自衛隊空挺隊員には事前に承知して貰っていた(田中)

昭和19年11月下旬のことである。当時教導航空軍の隷下で宮崎県の唐瀬原にあった第1挺進団に、サイパンに強



左端が熊倉氏

行着陸しB29の基地を覆滅する特攻隊として、一個中隊差出しの命令が届いた。

挺進団長河島慶吾大

佐は、この様な任務を達成出来るのは、挺進第1聯隊第4中隊長奥山道郎大尉が最適と考え、聯隊長山田中佐にはかり奥山を指名した。この中隊をなおも

存続させたかったので、他中隊から一部人員を第4中隊に入れ、奥山はこれらを含めて人選し、一二六名の部隊を編成した。一二六名という人数が上から示された数なのかは不明だが、半年

後沖繩に向い出撃した時に、この顔触

れは一人も欠けていない。

一方、第3独立飛行隊(以下3独飛と略称す)は、初めサイパン爆撃の為

銚田飛行学校で編成した部隊だったが、この頃は浜松に移り、機種を97重に改編し練成中だった。隊長は諏訪部忠一

大尉で、同じ頃サイパン強行着陸の飛行隊に指定された。

奥山隊は鉄道輸送で12月7日豊岡

(現在の人間基地)に到着した。その

時中野学校出身の将校八名下士官二名が指揮下に入ったが、その中の一人が熊倉少尉だった。

中野学校から来た十名は潜入謀者と

いうことで加わったが、先づB29を爆破する訓練を奥山隊の一員として行った。初めは年内に決行する予定だったが、3独飛の練度が所望の域に達していないので、翌年に延期して訓練に精

励している裡に、硫黄島に対する敵の砲撃が激化し、中継基地として使え

なくなってきた。奥山隊も浜松に移

り、月齢の関係上1月17日から22日まで毎日硫黄島に向う出発準備を整えた

が、同島の状況は一向に好転しないので、サイパン攻撃は遂に取止めとなっ

て了った。

奥山隊は古巣の唐瀬原(宮崎県児湯郡川南村)に戻り、3独飛は依然浜松

に駐った。中野学校出身の十名は完全

に奥山隊の一員として融合していた。

それから4ヶ月、一時は激戦中の硫黄

島増援の話も出たが具体化せず、最後

は沖繩作戦で航空体当り特攻を成立させる為、読谷と嘉手納両飛行場を一時

制圧するのに使われることになった。

5月24日に健軍飛行場から出撃したが、そのとき熊倉少尉以下12名を載せた97

重(3独飛高橋少尉、小野曹長)は、

出発時からエンジンの調子が悪く、遅

れて離陸した為編隊長機に随行出来ず、

加えてエンジンの出力が低下し高度が

保てないので引返し、隈の庄飛行場の

近くに不時着した。

以上の様なことを承知の上、以下の

対談記事をお読み頂きたい。——印は

自衛隊員の発言。

私の経歴 中野学校の教育

——熊倉様は中野学校出身と承りましたが、中野学校とはどの様な学校でしたか。

熊倉 その前に私の軍歴に就いて申し上げます。昭和17年12月に、当時私は満鉄のハルビン鉄道工場に勤めておりました関係上、現地の歩兵30聯隊に入営しました。学校教練に合格していま

したので、幹部候補生を志願して採用され、昭和19年2月に幹候10期生として豊橋予備士官学校に入校、六ヶ月の

教育が終り、静岡県二俣にある幹部教育隊に入隊を命ぜられました。どんな所なのか区隊長も判らず、唯厳選した者を寄越す様に言われたので、お前達を選んだのだということでありました。出頭してみると、長髪の守衛と覚しき人が、全員集合する迄多少間があるので帰省して来いと言われ、数日家に帰りました。

長髪の守衛と思ったのが陸軍大尉の教官で、入校式で隊長からは、秘密戦士を養成する中野学校の分校であると言われました。誰も自分はその事に向くとは思っていないので、その旨申立てましたが、その気持ちは判るが皆選ばれて来たのであり、一生懸命にやれと申渡されました。

甲種幹部候補生を志願することは自らの意志でしたが、それ以上は総べて命令で動きました。大楠公や明治維新の志士は、己の信念に基づいて自ら行動したでしょうが、我々は命令に従って忠実に行動するのみでした。

——二俣から本校へ行かれ、更に義烈空挺隊に入隊されたのですか。

熊倉 中野の本校には行かず、二俣で三ヶ月教育を受けて11月卒業、直ちに大本営陸軍部付となって市ヶ谷に赴任しました。

——二俣での教育内容に就いてお尋

ねします。

熊倉 人を嘯したりする様なことの出来ない自分が、何で秘密戦士に選ばれたのかは判りません。予備士官学校とは違って二俣では軍人勅諭なんかは脇に置いて、人と人との肌での付き合い方、世界中どここの国のどの様な人達とも腹を割った話し合える様になれと言われました。不動の姿勢を取る時に、

眼は輝きを持って教育されていたのが、此処では、眼の輝きを無くせ、肩を怒らせるな、天皇と聞いて姿勢を正すな、そんな態度では、どんなにうまく変装していても直ぐ正体を見破られるぞと言われました。日本人と見破られない為には、先づ天皇陛下のことは忘れろと教育されましたが、中々馴染めませんでした。

やがて、中野出身者は己の功績が認められ顕彰されることを期待せず、黙々と任務を遂行し、名を求めず実を挙げて人知れず死んで行く。この事のみが中野出身者の真の姿なのだという気持ちを強く抱く様になり、こうすることは不忠ではなく、任務達成上必要なのだと理解する様になりました。

戦後30年、ルバング島で頑張り通した小野田少尉は同期生です。小野田少尉の行動は、幸にして白日の下に明らかになりましたが、我々の仲間は南の

島々の残置謀者となり、生死不明で最後に戦死認定を受けた者が少なからず居ります。

情報収集、謀略、破壊、欺騙、通信遊撃等は、それぞれの専門教官から習いました。精神教育は専任の国体学教官により徹底して教育され、大楠公父子の忠誠心や明治維新の勤王志士の講義に、我々は殉忠至誠の感銘を受け、国家の大義に不惜身命の使命感を悟されました。

中野学校は、国家総力戦を念頭に、大使館付武官による収集情報以上に、経済力、思想、教育、民度等軍事力の基礎になっている相手国の総合国力を判断し得る質の情報を集めることを目的として、昭和13年に創立されました。初期には軍人のする仕事ではないと軽視する風潮もあったそうですが、優秀な先輩のお蔭で軍内で認められ強化される様になりました。戦勢非となつて、我々が入校した頃には、派遣可能地域はビルマ、インドネシア辺りが限界になっていました。むしろゲリラ戦の隊長が必要ということで、二俣分校が設立されたのです。

卒業に際して赴任先毎に分れて申告した時に、分校長熊川中佐は、「不撓不屈、死を決しても死ぬな」と言って、一人々々の手を握りました。11月末卒

業式前日に任地発表があり、私共六名はイの一番に参謀本部へ行けと申渡されて、その日の夜行で上京しました。

——平和な時代には思いも及ばぬ教育だと思えますが、どの様な経緯で義烈空挺隊に入られたのですか。

参謀本部へ出頭

熊倉 卒業も間近い頃だったと思います。サイパンだったかどこか南の島に謀者として入ることを志願する者は居ないか、と問われた時に数名が名乗り出ました。卒業時皆何処かの軍司令部に発令されましたが、先に名乗り出た六名が参謀本部付になりました。分校長も誰も我々がサイパンへ行くことは知りませんでした。参謀総長の隷下へ入るとはどういうことなのか、質問しても分校長も俺には判らぬという事でした。

翌日早く市ヶ谷に行きましたが、守衛所で正体不明の見習士官とあって、30分位待たされました。漸く連絡が取れて有沼中佐が出て来られ、「待っていたぞ、ついて来い。」と参謀次長室に案内されて、そこでお前達の任務はサイパン島に潜入することであると申渡されました。

編者註 有沼源一郎中佐は教導航空軍の参謀で当時サイパン攻撃の主

務者だった。

潜入せよということは、特殊潜航艇でも運ばれるのかと思いましたが、この作戦には落下傘部隊から一ヶ中隊が投入される。生還を期し得ぬ特攻隊であるとされました。

参謀総長室へ招じ入れられ、申告しました。通常部付の少尉や見習士官が着任しても総長に迄申告することは無いのですが、破格の扱いを受けました。梅津総長は、「お、お前達が征つて呉れるのか」と、慈父の様な眼差しで我々を見つめ、立上って一人々々握手をされました。この段階で全身硬直した感じで、何で自分が選ばれたのかという疑念は消失し、これこそ男子の本懐、名誉之に過ぎるもの無し、男とし



中野学校出身者

3列目左から阿部、熊倉、原田、棟方。2列目梶原、辻岡、一人おいて石山、渡辺

て此処まで認められたのであれば、与えられた任務に喜んで死のうという気になりました。

総長は特例としてこれら見習士官は、直ぐ任官させる様陸軍省と交渉せよと参謀に命じ、我々には空挺隊は未だ到着していないから、今のうちに郷里に墓参に行つて来いと言われ、菊花を下され、私達は本当に感激し任務必遂の誓を新たにしました。

——サイパンに潜入せよと言われた時の行動計画はどんな内容でしたか。

熊倉 有沼中佐からは、サイパンの情報が入り、又その手段もない。潜入して情報の収集伝達が主任務、玉砕したといえ残存兵力があるかも知れない。そうであれば協力して、ゲリラ戦に従事して貰いたい。その為に無線機二機を準備し、中野学校出身の通信のベテラン、将校、下士官各二名を付けると言われ、鬼に金棒と安心しました。この時中野の本校から、辻岡・石山両少尉、菅野・酒井両軍曹が加わり、潜入謀者は十名になりました。二俣からの六名中私を含めて三名は同じ歩兵30聯隊の出身で、而も予備士官学校も同中隊という関係でした。その中の原田少尉はハルピン医大卒で、軍医として入れませんが中尉になれるのにその途を選ばず、二等兵から始め

た人です。

奥山隊の一員となる

——豊岡の航空士官学校ではどの様な訓練を受けられましたか。記録によれば、奥山隊が豊岡に到着したのは12月7日となっています。合流された時のこともお聞かせ下さい。

熊倉 豊岡に着いた時、B29の実物の模型があり、それを見て、空挺隊が何をしにサイパンに乗り込むかはつきり判りました。それと共に、日本にこんな精強部隊がいたのかと今更乍ら驚きました。

体躯堂々、闘志漲り、軍紀厳正、団結強固、視察に來られた高官連中も、大本營の虎の子部隊と感嘆されました。私共は少尉であっても軍隊経験は短く、昭和9年入營の准尉以下現役下士官全員私達より長い軍歴で、経験豊富であるのに圧倒されました。

——中野出身者はどうされましたか。熊倉 我々はあく迄生残つて情報収集することが任務で、サイパン島の地誌を調べましたが、そんな準備よりも早く奥山隊の一員となるべく、空挺隊の一員として三人一組の編制の中に入り訓練を受けました。

必死を期して志気極めて旺盛な隊員に、我々は生残るのだとは言い出せま

せんでした。そうせざるを得ない雰囲気引込まれて了つたというのでしょか。

——B29攻撃訓練はどんな具合でしたか。

熊倉 初期の昼間訓練で、こんな大型機をどうやって爆破するのかと思いましたが、長い柄の付いた吸着爆薬を翼の付根に押付ける。帯状爆薬で胴体を巻く等の操作を、空挺隊の人達に負けない迄に腕を磨きました。

手榴弾の一発や二発、況して小銃を撃つてどうなるものでもありません。一人数十kgの装備をして次々と飛行機を爆破して行く訓練は、正に重量物搬走競走そのものでした。直ぐ夜間訓練に移りましたが、暗黒中三人一組の協同行動を取るのは困難でした。奇襲ですから迅速に行動しなければならぬ。一々命令してやることは出来ぬ。如何に呼吸を合わせて各自行動するか。

この訓練は一ヶ月位続けました。この間に空挺隊の人達と完全に意気投合する様になり、中野の連中も中々やるわい、と評価され渾然一体化しました。それは我々が口先だけではなく、身を以て示したことが最大の理由です。中野出身者は弾丸が尽きたからと突撃するのではなく、生きて生きて生き延びて情報を集め、ゲリラ戦を展開す

るのが任務です。奥山隊は五小隊に分れていて、小隊長は挺進隊臨時から決っていました。小隊は二ヶ分隊に分れていて、我々は分隊長ということになりました。

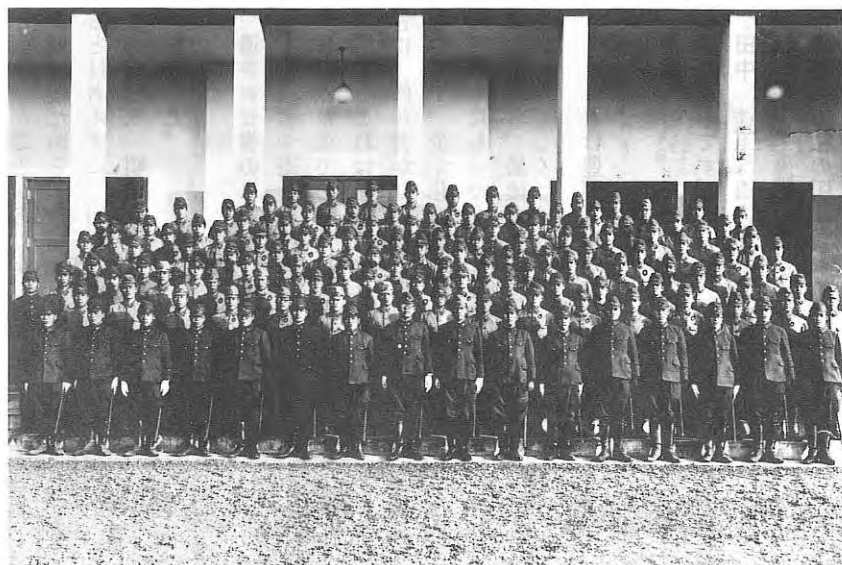
強行着陸して所在のB29を破壊したら、次は敵兵舎や武器弾薬集積所を攻撃するので、その時は中野学校組は別行動を取れと言われました。沖繩出撃時には、私の部下は生きている限り隊長に付いて行きますよと言って呉れ、指揮官冥利に尽きると思いました。

3 独飛の人達

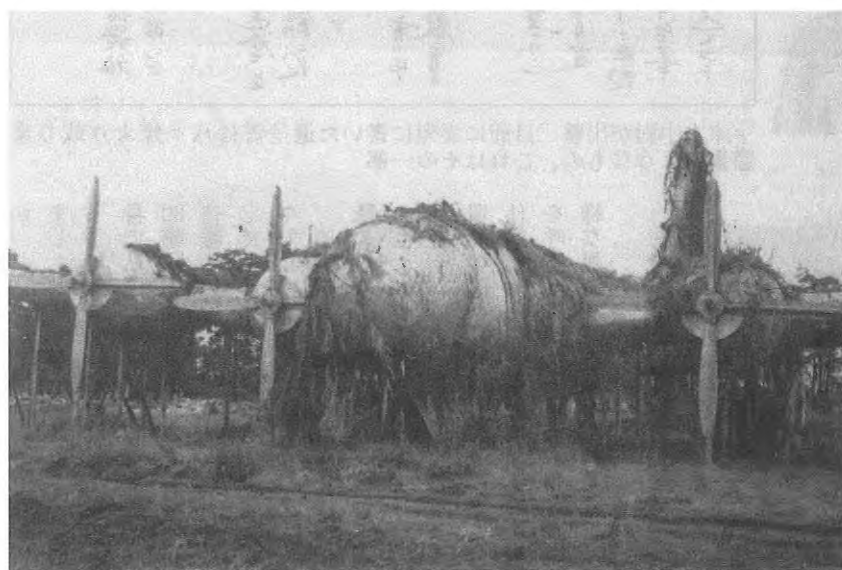
遅れて3独飛が訓練に加わりました。胴体着陸後は航空の人達も空挺隊と同一行動を取ることになっていましたが、それ迄地上訓練を受けていないので、全くの初年兵です。初めの頃は走るのが遅いし、直ぐ顎を出していました。

——でもその様な訓練をしたからこそ3独飛の方々も団結出来た訳ですね。

熊倉 3独飛の人達からは、敵機を強奪して帰って来ると言う言葉が出ました。航空兵として地上戦闘ではなく、あく迄パイロットとして戦い度いという気持ちが入っていました。俺達が敵機を分捕るから、それに乗って帰れと言われましたが、中野組はその様な状況になっても、残留謀者ですから決し



航空士官学校大講堂前で
(全員136名)



終戦まで残っていたB29の模型(米軍撮影)

て乗込むまいと深く心に銘じていました。一方、何とか航空の人達の目的が達成出来ないものかと心に念じました。

沖繩出撃時、奥山隊長は、沖繩では友軍が戦っているのだし、何とか友軍陣地へ辿り着いて再びパイロットとして頑張つて呉れ、と言われましたが、

諏訪部隊長は唯笑って居られました。3独飛のパイロットは、大部分は飛行練度不足、使用機も引退していた97重を引張り出して、爆弾倉を兵員室に改造しました。窓もなく真暗な部屋です。天蓋の一部と入口はベニヤ板張りになっていました。読谷に向う8機と、

嘉手納に向う4機のそれぞれの指揮官機にのみ航法係が乗組んで、後の機は只管編隊長機に追隨する様に指示されていました。

サイパンの時に考えられたことです。胴体着陸が成功する確率は先頭機が一番高いであろうということで、沖

一番機搭乗名簿

奥山大尉	隊長
辻岡少尉	
阿部少尉	中野学校出
酒井軍曹	通信担当
菅野軍曹	
尾身曹長	
北島曹長	
金山軍曹	
高橋伍長	
大月伍長	

【3 独飛】

諏訪部大尉	隊長	正操縦
川守田少尉	副操縦	
小林少尉	航法係	
長瀬軍曹	通信係	

繩出撃時には無線機要員四名は、全員奥山隊長機に乗込みました。分散して安全を図るか、全員一機に搭乗するかは大いに論議が交わされました。3 独飛の通信要員も中野組に合流することが考えられていました。

或る時、中野出身の阿部少尉は、参謀にもっと性能の良い飛行機をあてがって貰えないのかと尋ねた処、今、義烈空挺隊に与え得る飛行機は、これ以外には無いのだと言われて、判りました

と引下ったことがありました。そういう飛行機だから、着陸して出口から出るとは考えずに、何処でも蹴破ってそこから三人一組になって飛出せ、と言われました。

遺書寄せ書のこと

——遺書や寄せ書は何時どの様な形で書かれたのでしょうか。

熊倉 これは私が偶々うちの小隊の者に、何か書かないかと書いて貰ったものです。全く悲愴感は無く明るく喜んで書いたものです。そういう雰囲気でしたから、最後も笑って出て行きました。

熊倉 はい。そうです。偶々私の傍に居た連中です。

田中 達筆な遺書を残した宇津木中尉は、私が挺進練習部にいた頃騎兵だったので良く私の所に訪ねて来ました。熊倉 宇津木さんは騎兵出身、声が大にして語ることも無く、隊長が一番信頼していました。

田中 宇津木中尉は奥山隊長より一つつ年上で、埼玉県の人、字が上手です。血書は有りますか。

熊倉 私にはありません。血書は良隊長発意で書いたものです。私のは良

遺言書

一、今更なるも、生後諸君
 体(まゝ)ハ兄(兄)思(思)ハシ
 三、傷(傷)モコト
 二、小生(小生)為(為)多(多)字(字)充(充)道(道)金(金)並
 賜(賜)全(全)委(委)取(取)心(心)元(元)録(録)取(取)
 致(致)言(言)行(行)受(受)領(領)コト
 三、子供(子供)ハ(ハ)必(必)不(不)可(可)或(或)孤(孤)育(育)ニ
 ト(ト)思(思)フ(フ)テ(テ)モ(モ)中(中)等(等)教(教)育(育)
 終(終)了(了)セ(セ)シ(シ)ム(ム)ト
 四、存(存)バ(バ)子(子)息(息)大(大)形(形)望(望)ナリシ
 此(此)書(書)ニ(ニ)功(功)也(也)ト(ト)言(言)フ(フ)
 此(此)書(書)ニ(ニ)志(志)ス(ス)ニ(ニ)弟(弟)ニ(ニ)此(此)記
 事(事)ハ(ハ)今(今)更(更)ニ(ニ)思(思)フ(フ)所(所)ナ(ナ)ラ(ラ)ズ
 且(且)強(強)冠(冠)カ(カ)生(生)性(性)ト(ト)送(送)ル(ル)コト



宇津木中尉

宇津木中尉が出撃三日前に妻宛に書いた遺言書は八ヶ條より成り家憲書のようなもの、これはその一部

かったら書いて呉れということでもありません。皆字が上手ですね。私が一番下手で外に出せません。歩兵30聯隊出身で私達の先輩、尾身曹長は態々歩兵30聯隊出身と書き添えて呉れました。皆暖かい思遣りのある人達でした。そして期待に応えようという志気は旺んでした。

奥山隊は志願ではなく、挺進第1聯隊の編成の俣でそっくり移って来られました。妻帯者も居られました。航空隊もそうです。志願ではありません。豊岡の時は、防諜上奥さんとも会えず仕舞でした。唐瀬原では奥さんや家族を呼寄せて良いと言われました。その様な処置で、志気が乱れることはあり



基地の整備等に食料品を与える

ませんでした。

独身者が官給の甘味品等を奥さんや子供さんへと渡す光景が、屢々見受けられました。沖繩出撃時には、渡された握り飯や羊羹、その他食料品は、死に行く者には不要と、機付整備の人々に有難うと置いて飛立ちました。鉄帽も置いて行きました。

戦後嫌々行かされたとか、殺されたのだという様な意見を吐く人が居ますが、そんなことは全く無く、落下傘降下で鍛えた度胸で平常の演習に出る態度で、顔をほころばせて行きました。私自身もそうでした。弱みを見せたと言われまいと男の意地がありました。参謀総長に頼むぞと言われて、男子の本懐迷うこと等は毛頭ありませんでした。

両親への遺書の最後に、金銭関係無し、婦人関係無しと書いた阿部少尉は、寄書には可愛いあの娘が目につかぶと書いています。奥山隊長も之を見て、

お前正直なことを書くなあと笑って居られました。奥山隊長は肝の太い人物でした。

サイパン特攻取やめるとき

——サイパン攻撃が取止めになった時の心境はどんなでしたか。

熊倉 張詰めた糸がプツンと切れた感じがしました。奥山隊長は精強無比でしたが、3独飛の技倆では硫黄島中継でサイパン迄の夜間飛行は無理、と判断された様です。操縦の高橋少尉は涙を流して、ガソリン不足で充分訓練出来ないことを残念がっていました。当時は老若男女、国を挙げてガソリン代用の松根油作りに励んでいたことをご存じですか。そういう状況下で、訓練燃料の制限されていた3独飛の人達を恨む気にはなれませんでした。

唐瀬原に戻って隊員が苛立った時、奥山隊長は早まるな、我々は日本最強の部隊と言われている。虎は死して皮を残す。必ず皮の残る戦場に使うて貰えるのだから、皇国の興廃此の一戦に在りという時に、我々は使われるのだから、慌てることは無いと諭されました。

奥山隊の母隊である一聯隊はパレンバンに降下する筈が、乗船海没の為に壮挙を第2聯隊に譲り、サイパンも中

止になり、その後硫黄島に征くということで西築波に進出し乍ら、又唐瀬原に戻りました。戻った我々も、唐瀬原基地の人達も何となく気まづい感情で、出戻り、心中の片割れが戻った、という様な自嘲的な言葉が口を突いて出て、締まらない気持ちがありました。当時特別の給養を受けていたので、冗談半分に愚劣喰い放題だという様な発言もありました。

奥山隊長は、我々は戻って唐瀬原に待機しているが、作戦が中止になったのであり、特攻隊の任務を解除されたのではない。編成当時の意志と冷静さを保って行こう、と再び隊員を激励したので志気旺盛で懸念はありませんでした。

沖繩出撃決定

——沖繩出撃が決った時の部隊の空気、出撃前夜の心境は如何でしたか。

熊倉 パレンバン、サイパン、硫黄島と目的を果さず、愈々その時が来たと奮い立つものがありました。健軍飛行場に集合した時、奥山隊長も諏訪部隊も誰一人欠けること無く全員が揃い、皆やあやあと声を掛け合って、今度こそは大丈夫だと歓声を挙げました。報道関係者も同じ顔触れが集まりました。あんな歓声を挙げて笑顔で出撃した特

攻隊は義烈だけですね、と出撃を見送った後で言ったそうです。我々は意識してそうしたわけではありません。愈々乗込む時に、何処までも付いて行きますよと部下から言われた時の感動は、忘れることは出来ません。私の様な至らぬ指揮官にその様な信頼を寄せて呉れて、本当に有難いと思いました。

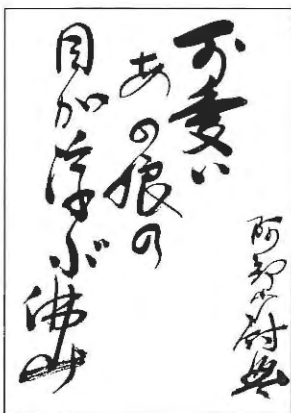
菅原 それ迄各隊毎に別の場所待機して居られたのですか。

熊倉 奥山隊長は唐瀬原で中野組は一緒です。私は奥山隊第3小隊第2分隊長として起居を共にしました。

故障不時着

——出撃前後の状況に就いて話して下さい。

熊倉 完全装備で一人80kg以上となり、積載重量超過です。訓練時には16人乗込んで離陸した体験がありました。が、この時は14人で2回滑走を繰返してどうしても離陸せず、予備機に乗換えることにしました。既に離陸した11機は編隊を組んで翼を振っています。整備の曹長、この方はご存命ですが、予備機の状態では飛上っても直ぐ有明海辺りに落ちて了う、と使用に反対しました。挺進団長は困惑されて、どうすると私に尋ねられたので、私は征きますと答えました。そうしたら団長は、



あまの娘

あまの娘の
月か浮ぶべし

あまの娘の
月か浮ぶべし

征くか、征って呉れるか、よし、と言われしました。その時に団長の何かほつとされた顔が忘れられません。予備機は離陸浮上しました。私の機は渡部機の後に付いて行けば良いということで、航法係は乗っていない。それが遅れて飛立ったので、たった一機動で兎に角

田中註 3 独飛の整備は浜松にいるときは、浜松飛行学校が担当し、健軍に来てからは、飛行第60戦隊が担当していた。この独立飛行隊の編制に無理があった。

熊倉少尉の搭乗機は、飛行隊側は高橋少尉と小野曹長の二名で航法係はいない。副隊長である渡部大尉の搭乗機の僚機として嘉手納に向うことになっていた。渡部機の操縦者は久野中尉と荒谷少尉、航法は酒井少尉、通信が葛島曹長だった。

先程の話の中で挺進団長のことが出ていますが、奥山隊の母隊である第1挺進団長中村勇大佐(故人)のことで、この作戦に直接責任はないが健軍に来て義烈隊の出撃を手伝っていた。遺書、遺品等が散佚しなかったのも、この人が預かったからである。

沖繩方向に最短距離で飛べと指示しました。

雲仙岳を越えて間もなく片肺になりました。元々全機沖繩に行けるという確信はありませんでした。何機、どの機が沖繩に到着出来るのか、皆内心賭けの様な気持ちを抱いていました。同時にどうなってもそれは武運であり、例え海没してもそれはそれで御奉公だと私は割り切って居りました。

処が飛行方向が全く判りません。エンジン調子が悪いと正操縦者の高橋少尉が私に告げ、どうするか判断を求めて来た時、私はみすみす海没の途を選ぶより、中野教育の、萬策を尽くして生きて生きて生き抜いて、国の為に尽くす途を考えるのが任務である、という考えが脳裡に浮かびました。責任は自分が取れば良いことだと。高橋少尉にこの俣行くことは無い。沖繩に行きつく確信はなく高度は下がる一方でした。東北東へ進路を取れと、防音装置のない爆音の中で怒鳴ると、少尉はオウと応えました。私はこの精銳の14人をむざむざ海没させることなく、何としても生還させて働いて貰わなければならぬ、と中野学校教育の結果が突嗟に然らしめた次第です。

皆目見当がつかない中で運というのか、雲の切れ目に幽かに雲仙岳が見

えました。熊本方向に向かっていたのです。その時塔乗機は精々二、三十メートルの高度しかなかったのではないでしょう。上昇出来ずにいる内に、限の庄飛行場近くの松林に墜ちてしまいました。

翌朝健軍飛行場に戻ったら、お前の飛行機は整備不良で無理も無かったと挺進団長に言われました。私の機のみと思っていました。翌25日昼頃になって、天草付近に三機不時着したことが判って、これは一体どうしたことなんでしょうか。

皆さん生残って良かったねと言われるますが、私の実感としてはそういう気持ちにはなれません。中野学校から征った十人中、生残ったのは私一人ですが、亡くなられた方が、私一人卑怯未練で生残ったのだという様には、毛頭思って居られないと確信しています。

菅原 熊倉機が遅れて離陸してから不時着する迄、どの位の時間が掛ったのでしょうか。
熊倉 怪しい飛行機が墜ちたということで、付近の住民が集まって来ました。続いて飛行場勤務員も馳付けて来ました。現場に一時間位居たでしょうか。限の庄飛行場に赴いた時、今沖繩に突入したぞと知らされました。
菅原 突入報の受信は22時11分でした。一斉離陸は19時頃だったのでしょ

うか。
——離陸は18時40分になっています。菅原 離陸が30分遅れとすると、19時10分位になります。そして不時着後現場に一時間位居られて、限の庄飛行場に着いた時沖繩突入を知らされたという事は、22時20分前後でしょうかと考えられますね。

田中 正操縦者の高橋少尉はどうなりました。
熊倉 副操縦者の小野曹長は、肩に重傷を負って入院しました。翌々日ですか、無傷の高橋少尉は、新任務を受領したということで、福岡か何処かに行かれました。

田中 皆60戦隊所属になった筈です。
熊倉 60戦隊ですか。
田中 そして沖繩への物量投下作戦に従事しました。
熊倉 皆さん亡くなられたのでしょ

う。

高橋少尉の書
大石氏に楠をならむ
中野少尉の遺書
高橋少尉

田中 そうだと思えます。

熊倉 玉碎寸前の沖繩に物量投下に

行かれて、皆さん戦死されて了った。

その話を聞いて別の悩みを生じました。

あの時海没していれば、特攻戦死認定

で二階級特進となり、御遺族もそれな

りの納得があったのでしようが、それ

が単なる戦死扱いになりました。

今でも私はその点スッキリしないも

のがあります。あの時海没していれば、

義烈空挺隊員として顕彰を受けた譯で

す。それが私の中野学校の判断で、そ

うでないことになりました。このこと

は、この私に本当の殉国の精神に自我

の曇りがあったのか、中野精神を生か

すのが私の使命であったのか。中野の

場合は個人行動ですが、部下を持った

場合には、部下のことを考えて行動す

べきであったのか、ということに関し

ての私の悩みは、未だ明確な結論を得

て居りません。本当に申譯ない気が致

します。

私の三角兵舎に高橋少尉が来て、申

譯なかったと涙を流して抱合って、こ

れから新任務に就くとその一言だけで

分かれしました。それ以後香として消息

が判りませんでした。60戦隊に配属

されたのですか。3独飛の人達に関する

情報は閉ざされて全く判りませんでした。

田中 未だ良く判らないことがあり

ます。

熊倉 60戦隊の記録にも載っていない

いではありませんか。

田中 物量投下作戦で戦死した3独

飛出身の方は、60戦隊の戦死者名簿に

記載されています。村上中尉機の水上

曹長は、不時着時の火傷で亡くなられ

たことが判っています。不時着した正

副操縦者8名中、水上曹長一人がその

時戦死です。

熊倉 米軍資料によると沖繩には一

機が胴体着陸に成功しています。飛行

順序が発射時の建制通り保たれていた

かどうか判りませんが、一、三番機は

撃墜されています。九から十二番機は

中飛行場に向う筈でしたが、米軍戦記

には嘉手納に関しては何も書いていな

い。恐らく戦力を分散させずに、全部

北飛行場に向ったのではないかと、私

は推察しています。米軍のタッカー戦

記に依ると、五機目の進入機が胴体着

陸したことになると思います。中野組は、

一、三、四、六、七、十二番機に乗っ

ていました。私の機は十番機でした。

田中 胴体着陸成功したのは誰の機

と考えられますか。

熊倉 原田なのか、梶原なのか。原

田少尉機の線が一番濃いのが何とも言

るのだそうですが、整備の曹長に頼ん

でいるのですが、彼も80才になって了っ

て……。

——最も記憶に残っている方の印象

をお聞かせ下さい。

熊倉 3独飛の諏訪部大尉には、時々

お会いする程度でしたが、健軍飛行場

に集った時、自分で彫ったという観音

像を皆に示されました。奥山隊長とは

性格は可成り違っていて、大声を出し

たりされることも無く、温和な文学的

素養の感じられる方でした。

田中 あとまだ何か言い残したこと

はありませんか。

熊倉 全部正直に言った積りです。

隊員は全国から集っていたので、御遺

族もバラバラで、戦死者の状況が良く

判らない方が大部分です。そういう御

遺族の方々の為にも本当のことを書残

し、話すことは、生残った者の使命と

思っています。

田中 計画ではあなたが最も印象深

い人何人かについて、思出を話しても

らう積りでしたが、予定時間を過ぎて

了ったので後から書いて送って下さい。

思出に残る人の記事が来ていますが

紙面の都合で次号にします 田中

特攻烈士の御遺髪 ご遺族の許に還る

昭和20年6月8日、沖繩周辺洋上で

散華された第14振武隊岡田義人少尉の

御遺髪が、此度ご遺族の許に無事お還

りになりましたことをお伝えしたい。

特攻隊慰霊顕彰会当時、会の発展に

ご尽力頂いた故丸田文雄氏が預かって

おられた岡田少尉のご遺髪を、丸田氏

夫人綾子様が同氏の遺品の中から発見

されたことが発端である。それ以来、

夫人はご遺族にどうしてもお渡しした

いとのご熱意から、八方手を尽くされ

たがなかなか手掛かりが得られず今日

に至った。

この間、当協会、偕行社ともども協

力調査した結果、此程、漸く義弟の

岡田隆様に辿りつきお渡しする運びと

なったのである。

時は9月23日、第47回特攻平和観音

年次法要に、岡田隆様、丸田綾子様共

にご出席され、ご遺髪の授受が無事行

なわれた次第である。

これもひとえにご英霊のお導きによ

るものとご両家の感激一入であった由、

伺った。

年次法要に相応しいエピソードとし

てご紹介申し上げます。

(平成10年9月24日、木村元正記)

殉義隊

若杉是俊少尉の日記

偕行社の機関誌「偕行」の昭和58年11月号に、当時特攻戦没者慰霊顕彰会の委員をしていた故水野帝氏が投稿した「若杉是俊日記抄」と題する記事がある。その中で特攻隊員に決定した以後の分を、こゝに転載する。転載の冒頭部分は、水戸飛行学校付で特操の補助教官として、能代飛行場に在った時期のこと。若杉少尉は陸士57期大正12年生れ。



十月二十一日(昭和19年) 土曜日
雲 篠原中尉殿水戸ヨリ帰隊セラル。

飛行師団長閣下ヨリ人秘封書アリ、曰ク、決死隊要員ヲ募ルト。夫レ日本人ナル限り、死モトヨリ問題ニ非ズ。然レドモ数次ノ本土空襲ニ全機撃墜ノ報ヲ聞カズ。何故ゾヤ。体当リ無キナリ。一機ニテモ生還センカ、敵ハ増長シテ又必ラズ来襲スベシ。戦ノ決ハ武力ニ非ズシテ魂胆ナリ。敵ヲシテ「如何ナル物量ヲ以テスルモ、皇軍ハ、從ツテ神州皇土ハ侵シ難シ。否、絶対永久ニ侵犯シ得ズ」ト思信セシムルコトコソ、戦勝最大ノ鍵タリ。其ノ法ハ如何。他ナシ。今方ニ敵ハ全力ヲ賭シテ神州ニ迫リ、一挙ニ勝敗ヲ決セント焦慮シアリ。其ノ進攻ヤ寔ニ侮リ難シ。台湾沖航空戦ニ、或ハフイリッピン上陸ニ、其ノ大半ヲ撃砕シタリト雖モ、未ダ其ノ野望ヲ破碎スルニ至ラズ。全機全艦隊ヲ滅ゼンバ未ダシ。予ハ誓フ。敵ニ見エタル第一日ニ編隊長機ニ徹底的攻撃ヲ指向シ、全弾ヲ射チ尽クシタル後必ず決スル所アルヲ。師団長閣下ヘノ血判忘ルマジ。名ヲ思フベカラズ。身ヲ思フベカラズ。唯、上御一人ヲ念ジ奉ルノミ。唯皇國ヲ念ズルノミ。皇國ノ天壤無窮ヲ信ジテ断行アルノミ。幼年校以來何ヲ学ビ何ヲ鍛ヘ何ヲ得タ

ルヤ。學術科ハ人ニ負ケズ勉強シタリ。努力シタリ。唯予ノ恐々トシテ常ニ思フハ、彈丸雨飛ノ間、百機紛戦ノ間、猶ヨク平常心ヲ以テ悠久ノ大義ニ生キ得ルヤ否ヤノ一事。杉本中佐ハ一生涯ヲ通ジテ御勅諭忠節ノ項ナル「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽し」ノ心境ニ透徹センガ為、総ユル修行ヲ積マレタリト。

噫、必ず必ず熱貫セン。ヤラン哉。

天皇陛下 万歳

父上様、母上様、是俊ハヤリマス。

(註 以後十一月二日まで記事なし)

十一月二日 午前学生ノ後方射撃教

育ヲ終ヘ昼食ニ赴カントスル時、篠原

中尉殿ニコニコ走り来リ「若杉、貴様

出陣準備ノ為即刻帰隊ダ。御目出度ウ

ト仰言ラル。噫愈々出陣カ。男子ノ本

懐、感激ノ極。教官拝命ニヨリ出陣ノ

機当分失シタラント思ヒアリタルニ。

一三三〇津川隊長殿(53期)始メ懐カ

シキ能代分遣ノ人々ト訣別。海野(66

57期)操縦ノ軍偵ニ搭乗出発ス。九七

戦、一戦ニ八郎瀉迄送ラレ感激ニ堪ヘ

ズ。唯粉骨勉勵ヲ誓フノミ。顧ミレバ

能代ノ名残又尽キザルモノアリ。大鰐

ニ遊ビタル際ノ純心ナル少女ノ踊リ、

織田病院ニ森玉ヲ見舞ヒタル時ノみつ

チャン、すまチャン、寛チャン、正也

チャントノ無邪気ナ戯レ、或ハ都亭ニ

テノ楽シミ、殊ニ「うるこ」ニ於ケル
美津ノ心カラノモチナシ。人ノ交リハ
心ト心ニコソ、純ナルベシ。邪無ケレ
バ全ク爽。能代ハ第二ノ故郷。

一五三〇懐カシノ水戸飛行場ニ到着
隊長殿ニ申告ニ行クニ、父母思ヒガケ
ズ室ニ在ス。全ク驚キタリ。第一線ニ
立ツトテ隊長殿態々呼び下サレタルナ
リ。夜ハ平磯館ニ泊リ久方振りニ温キ
父母ノ愛ヲ受ク。噫、予既ニ思ヒ残ス
コト無シ。征カン哉。征カン哉。忠則
孝。念々是忠則孝。

十一月三日 雨 午前父母ヲ校内ニ

案内シ、午後水戸迄御送リス。コレガ

今生ノ見オサメカ。母上ノ涙、止マル

無シ。父母上ハ申サレタリ「是俊ハ既

ニ私ノ子デハ無イ。死シテモ決シテ悲

シミマセン。流ス涙ハ嬉シ涙デスヨ

有難キ哉。不肖ノ子乍ラ全力傾注シテ

成ラザルコト無カルベシ。唯己ガ誠ヲ

尽サンノミ。終始世話シ呉レタル海野

ノ友情感激ス。戦友ノ分モ必ずヤル。

夜ハ明治ノ佳節ヲ寿ギテ將校団ノ宴

会アリ。心ヨリ祝賀且ツ御偉徳ヲ偲ビ

奉リ、現下情勢突破ヲ固ク期シタリ。

十一月十一日 星友寮ニ遊ブ。純情

ハ人ヲ動かス。肉体ハ心ノ容器。容器

ヲ研クニ汲々タル勿レ。須ク心ヲ磨ク

ベシ。

十一月十八日 水戸ヨリ常代サン来

隊。懐シキ姉妹ノ感。

十一月十八日 午前水戸ヨリ慰問団

來隊。舞踊、武蔵ノ芝居ヲ観ル。終リテ昼食ニ赴ク時、篠原中尉殿ニ呼止メラレ、驚キテ尋ヌレバ能代空輸部隊帰還セリト。補佐教官連ヲ始め、学生ノ懐カシキ面々ニ会フ。第一線ニ征ケテ盛大ニ送ラレシ手前、未ダ居残リアルハ慙愧ニ堪エザル所、サレド懐カシサニ恥モ忘レテ談笑。緒方、立派ナ写真ヲ贈ル。嬉シ。夜ハ早速星友寮ニ能代帰還部隊ヲ招待ス。武人ハ、特ニ航空人ハ天真爛漫、物事ニ一点ノ滞リアルベカラズ。人ヲ相手トスルヨリ心乱ルルナリ。須ク天ヲ相手トシ、名ヤ外聞ヲ念外ニ、所信篤進ノミ。

十一月十九日 日曜日 晴 家ヨリ小刀入手セリト便リアリ。父上ノ御心尽シ、忝ク有難シ。報恩ノ道、他ナシ。征カン哉。征キテ戦ハン哉。河野雅章サンモ壮烈ナル戦死ヲ遂ケラレタリト。屍ヲ乗り越エ乘リ越エ米鬼英鬼ヲ殲滅シ尽クサンノミ。

十一月二十一日 四式戦地上事故生起、慙愧ノ他ナシ。

十一月二十六日 学生ノ射撃教育、予ノ組全員合格ノ好成绩ニ喜ビテ帰ルヤ、皆予ノ特攻隊編入ヲ伝フ。確實ナル内命ニハ非ザレドモ、概ニ確定ノ模様。先般ノ内命消滅ニ些方愕然タリシ

所ニ今日ノ噂、歡喜ノ至リ。愈々征カ

ン哉。今日迄孜々修練ノ功ヲ体当リニ凝集シテ大艦ヲ屠ル、又快ナラズヤ。「人生有限名無尽、楠氏誠忠伝万古」噫、悠久ナルカカナ人生ヤ。予死スト雖モ魂魄何ソゾ死セン。日本人ノ有難キハ死シテ尚生クルニアリ。純忠ノ大義ニ生クル時、肉体ハ亡ブト雖モ尚死セザルナリ。否、生死以上ニ燦然タル生ヲ稟クルナリ。何ゾ名ヲ求ムルニ非ズ。死後讚ヘラルルヲ希フニ非ズ。唯予ノ死ハ予ノ輝カシキ生ナルヲ信ジ、此ノ生ヲ得ル機ノ近附キタルヲ心ヨリ喜ブノミ。噫、噫、男子ノ本懐ナラズシテ何ゾヤ (以後鉛筆書き)

十一月三十一日 昨日特操モ到着シ、我八紘第十隊ノ編成終了シ、本日出発ノ予定ナリシモ天候ノ為延期ス。夜ハ星友寮ニ遊び、浜田、善教、海野等ト盃ヲ交ハス。航通校ノ者トモ逢フ。予ノ壯途ノ心ヨリ祝福シテクレタリ。予程幸福ナル者ハ此ノ世ニ非ザルベシ。星友寮ノ人々ノ御恩又忘ラレザルベシ。樂シカリシ束ノ間、噫、頑張ラン哉。

十二月一日 藤屋ニ於テ八紘第十隊宴会ヲ行フ。編成完結及其ノ前途ヲ祝シテナリ。隊長敦賀中尉殿ヲ中心ニ一致団結、任務ニ慕直向センノミ。噫、義ハ山嶽ヨリモ重ク、死ハ鴻毛ヨリモ輕シ。

夜退庁時、八重坊、清チャンニ荷物ヲ運ンデ貰ヒ乍ラツクツク語ル。純情程清々シク神々シキ徳操ナシ。予ハ子供ト話スハ大好キナリ。「俺ハ敵艦目ガケニツコリ笑ツテ体当リスルヨ。ダカラ八重坊モ清チャンモ笑ツテ俺ノ出テ送ツテクレネ」

「涙ガ出チャツタ」ト二人泣キ笑ヒツツ向フヲ向イテシマフ。八重坊自作ノ詩

若鷺の 譽も高き 特攻隊 召出されて 兄は征くらむ 全ク予ノ如キ未熟者ヲ特攻隊ニ選ビ下サレシ有難サ、コノナキ名譽ニ唯々感泣、奮闘ヲ誓フノミ。召出サレタ此ノ兄ハ必ズヤル。ヤル。

十二月二日 土曜日 晴 一日特操ノ訓練。彼等一戦搭乗十数時間。気魄ハ旺盛ナレドモ技術未熟、訓練中二機大破ス。然レドモ吾人何ゾ意氣消沈セシヤ。愈々見敵必沈ノ業ヲ練ランカナ。余暇ヲ求メテ身ノ廻リノ整理ヲ為ス。八重坊、清チャンノ手伝ヒ忝シ。出発ノ明日ニ控へ、夜ハ自重、充分ノ休養ヲトル。

十二月三日 日曜日 快晴 ウララカナル秋晴レ、吾人ノ壯途ヲ天モ祝ヒ呉レタルカ。諸々ノ人ト最後ノ御別レヲシテ、〇九〇〇將集壯行会ニ臨ム。参謀総長代理殿、航空総監代理殿ヨリ

夫々忝キ御訓示を戴キ、必ズ醜ノ御楯ノ本分ヲ全ウスルヲ御誓シテ式ヲ終へ、妙チャン、繁チャン態々見送りニ來ル。有難シ。師団長閣下ヨリ「万山不重君恩重、一髪不輕我命輕」ト最後ノ御訓示ヲ戴キ、皆ノ打振ル旗ニ送ラレ乍ラ一〇〇〇勇躍壯途ニツク。皆様サラバ。長ラク御世話ニナリマシタ。若杉ハ必ズヤリマス。屹度ヤリマス。見テ居テ下サイ。

一五四〇新田原着。四機不時着ス。新田原兵站宿舍ニ泊ス。夜、一同宮崎神宮ニ参拜必沈ヲ誓ヒ奉ル。

十二月四日 月曜日 飛行機ノ整備及不時着機ノ追及ヲ待ツ。三機到着。秦機加古川ニテ大破セリト。

十二月五日 火曜日 〇八〇〇飲送裡ニ離陸。沖繩ヲ經テ台湾ニ向フ。航進発起スルニ十機ノ管ガ六機。其ノ儘出発、一〇二〇沖繩着。新田原上空、空中集合ノ際三竹(少尉) 空中接触ノ為墜落殉職。噫惜シイ哉。惜シイ哉。敵艦ニ目見ユル迄ハ自重自愛スベシ。天候不良ノ為予定変更、沖繩ニ泊ス。飛大長荒井大尉殿ノ心カラナル饗応ニ感激ス。

十二月六日、七日 追及機待機及ビ飛行機ノ整備ニ過ス。七日情報入ル。敵モ仲々ヤルワイ。今二日ニ物見セテクレン。

十二月八日 午前、新田原ヨリ日野編隊三竹少尉ノ遺骨ト共ニ到着。遺骨ト共ニ体当リ。噫、ヤランカナ。

十二月九日 久方振り雲高シ。〇一

〇〇(註 一三〇〇か)台湾ニ進発セントセルモ隊長機故障ニテ一応全機着陸。予編隊長トナリ、六機ニテ先発ヲ命ゼラル。

颯爽進発セルモ、途中天候不良、海上一〇〇(米)位ニテ前進、宮古、石垣モ雨ノ為標定シ得ズ。ガムシヤラニ前進、台湾南部晴ノ予報ヲ頼リニ。途中雲下飛行不能トナリ、雲上ニ出デ前進、雲ノ隙間ヨリ陸地発見、大喜ビニテ降りタルモ台湾ニ非ズシテ小サナ島ガツカリシツツ尚搜索スルコト一時間

余、雲益々厚クシテ台湾全然標定シ得ズ。一同島ニ不時着決心、此ノ間二機見失ウ遺憾。愈々不時着セントシテ、本隊ヘノ連絡等ヲ思ヒ、今一度ト飛行中、偶然台湾飛行場発見、予ノミ不時着。噫、無力者ナルカナ。慙愧ノ至リナリ。御上ノ赤子ヲ斯クバラバラニシタル罪、万死ニ値ス。余程切腹シテ海中に入ラント思ヒタルモ、体当リノ日迄許シ給ヘト我慢シタル辛サ、コノ償ヒ必ズ為サズンバヤマジ。当飛行場ニアル軍偵察隊長森大尉殿(敏夫、54期)

ノ御厚情ニテ桜旅館ニ泊ス。不時着機ノコトヲ思ヒ、寝ヤラズ。無念、残念。

(失敗ノ因) 1、無理ヲシタ 2、決心動揺シタ 3、搜索計画的デナカッタ

十二月十日 軍偵察隊ト共ニ紅頭嶼不時着機偵察、三機アリ。林、門倉ハ無事ナルモ、後一名ハ如何、心配ナリ。東ハ恒春ヨリ屏東ニ向ヒ無事ナリト。日野、最後迄編隊組ミアリシニ如何シタルナラン。噫、長内如何。慙愧ノ至リ。

午後屏東ニ連絡トルニ隊長殿既ニ到着セラレアリ、不時着人員收容シテ追及スルヲ報告シ、不覚ヲ謝ス。遺憾ナリ。遺憾ナリ。

十二月十一日 曇(註ここより再びペン書き)軍偵ト共ニ偵察ス。紅頭嶼西方不時着セル林ハ無事ノ如ク、盛ンクニ丸ヲ振りアリ。不時着場ノ方ハ頭ニ縋帯シアリ。門倉ノ如シ。アト長田カ日野ノ中一人、必ズ不時着シアル筈ナルモ未だ連絡無シ。

夜遅ク、島西方ニ日野少尉、林軍曹不時着場ニ門倉、長田(一名重傷、一名軽傷)在ルヲ知ル。之ニテ全員所在判明セリ、寔ニ嬉シ。サレド遂ニ又一名重傷者ヲ出セルハ申訳ナキ極ミナリ。

十二月十二日 曇 不時着ノ状況モ既ニ解リ、且救助船モ出発ト聞キ、一四〇〇屏東ニ赴キ隊長殿ニ其ノ旨報告ス。沖繩ヨリ台湾ニ向フニ宮古、石垣

ヲ標定セザルハ無謀ナリト御注意ヲ受ク。慙愧ノ至リ、一言モ無シ。夜ハ町ノ人々ノ酌ニテ宴ヲ催ス。甚ダ愉快ナリ。

十二月十三日 水曜日 曇 一三〇〇

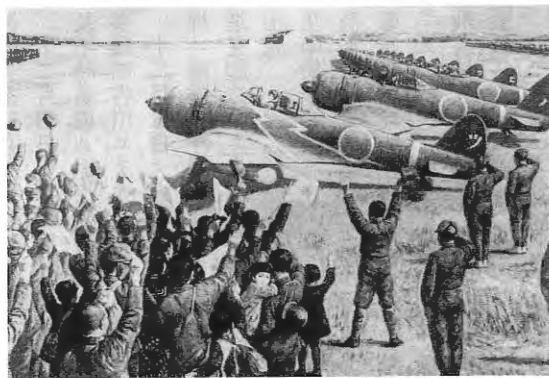
〇双練ニテ台東ニ還ル。救護船波浪荒キ為帰帆遅レ、明日到着ノ予定。森隊長殿ノ御世話ニテ知本温泉ニ遊ブ。お母ちゃんノ情嬉シ。昨日来、少シ感冒気味ニテ体ダルシ。病ハ気カラ。

附記 若杉少尉の日記はここで終る。この日記は、屏東から内地に還る整備員に托し御両親宛に郵送されたもので、日附は屏東十二月十六日となっている。殉義隊は十一月十八日屏東からクラークに前進、同二十一日一二四〇頃バナ

イ島西方海面を北上中の米輸送船団に敦賀隊長以下(若杉少尉を含む)五機が突入した。米海軍作戦日誌による同日の米軍損害は「LST二隻沈没、駆逐艦一隻損傷」と記されている。偶然、殉義隊突入の二時間前、同海面に出撃(ネグロス島から)した私の記憶では、

は約40機の戦闘機(P-38、P-47)が哨戒に当たっていた。あの状況下で、よくぞ敵艦船まで肉薄出来たと思う。突入した特攻機は殉義隊五機、旭光隊

一機、小泉隊一機。その日ほかに戦闘機十五機が未帰還となった。(56期 水野 帝)



殉義隊常陸を出発 (伊原宇三郎画伯筆)

殉義隊

中尉敦賀真二	陸士56	19.12.21突入
少尉日野二郎	陸士57	19.12.21突入
少尉若杉是俊	陸士57	19.12.21突入
軍曹山崎武雄	昭14	19.12.21突入
伍長門倉好也	昭16	19.12.21突入
少尉樋野三勇雄	特操1	19.12.22突入
伍長林 与次	昭16	19.12.22突入
伍長高宮芳司	昭16	19.12.29突入
少尉東 宏	特操1	20.1.7突入



留魂録

(特攻隊員の日記)

第79振武隊

佐藤新平曹長

仙台乗員養成所7期

20年4月16日知覧出撃

戦死 23才

六歳に互り、練り鍛えし腕に十二分の自信あり。

唯健康に充分注意なし、轟沈の訓練に励まんのみ。

父上、母上様も御喜び下さい。

軍人としての修養は只立派な死場所を得るにあります。最後まで操縦桿を握って死ねる有難い死場所を得る事が出来、新平、幸福感で一杯です。

亡き兄もきつと喜んで呉れる事でしょう。これから轟沈の日まで日誌を続けます。遺書とて別に書きません。

死生有命 不足論
男児従容 散大空

三月二十八日

午前新しき航空服一式支給さる。

午後、部隊長と共に熊谷へ飛行機受領に行く。御園大尉殿に今度の事を申告、御礼をのぶ。

愈々明日から轟沈の訓練の予定なり。豊崎軍曹より「愈々出発沖繩沖の戦果に期待あれ」との伝言あり。唯命を祈るのみ。

三月二十九日

午前、隊長山田少尉の訓話に「空中戦士として最高の名誉たる特別攻撃隊に採用されし我々は、大きな矜持のもとに行動を律する様に。日々のあの行

動が大きな戦果を生んだのだと言われたい」と。唯必死だけでは任務達成は不可なり。

死は易く任務は重し。平素の訓練に特攻魂を以て当り、初めて御役に立てる死に方が出来るものなり。小生も余命長くして八月までなり。任務達成の瞬間まで少しでも多く役立つ事が出来る如く心技の練磨に邁進せむ。

午後愛機の器材取扱法を実施。一度修習せる機種なるも、任務達成の絶対唯一の武器であり、又命中の日までの死生を同じゅうする愛機なれば研究の余地多々有り。

十六時頃、偶然にも仙台養成所時代の同期、綿貫軍曹、立川より飛来、一時間余、養成所時代の事、三期生の消息等、なつかしい想い出話に花を咲かす。彼等も間もなく前線出発との事、成功を祈る。

同期も大分戦死との事、靖国神社の同期生会に立派な武勇伝の一席、土産に出来る如く努力せむ。

三月三十日

此の所、毎日快晴の日が続く。

午前八時、灰山に飛行機受領に行く。一足違いで仲本猛ちゃんに会いかねる。演習は離着陸……。出撃の予定が早くなりしとの事で、又午前、午後の演習

十六時半、会食の為、川越市に行く。隊長以下十二名、和氣瀧々お互いに胸襟を開き合い、愉快な一夕を送る。

三月三十一日

愈々艦船攻撃の訓練に入る。必中必殺の信念のもと……。

昼頃、旧隊長御園大尉殿来り数日中に愈々前進基地に出発との事。陸軍大臣より鉢巻送らる。出撃までに、も一度兄の墓参りと思いしも時間なし。

お父さん、お母さん、新平何一つとして思い残す事とありません。唯御国の為立派に死ねる喜びで一杯なのです。

唯一つ心配なのは、半年の間に二人の子供を失うお父さん、お母さんの事です。

苦勞ばかりおかけしたお父さんお母さんに、これからはうんと親孝行をしよう……。何時も兄さんと言った言葉でした。

実はこの間かえった時も、ほど今度の事は解って居りましたが、遂に言い出せませんでした。

だが、お父さんお母さん、新平は死

となる。ピストも任務が任務なので非常に活気あり。

十六時半、会食の為、川越市に行く。隊長以下十二名、和氣瀧々お互いに胸襟を開き合い、愉快な一夕を送る。

三月三十一日

愈々艦船攻撃の訓練に入る。必中必殺の信念のもと……。

昼頃、旧隊長御園大尉殿来り数日中に愈々前進基地に出発との事。陸軍大臣より鉢巻送らる。出撃までに、も一度兄の墓参りと思

いしも時間なし。

お父さん、お母さん、新平何一つとして思い残す事とありません。唯御国の為立派に死ねる喜びで一杯なのです。

唯一つ心配なのは、半年の間に二人の子供を失うお父さん、お母さんの事です。

苦勞ばかりおかけしたお父さんお母さんに、これからはうんと親孝行をしよう……。何時も兄さんと言った言葉でした。

実はこの間かえった時も、ほど今度の事は解って居りましたが、遂に言い出せませんでした。

だが、お父さんお母さん、新平は死

見捨て給わず。

有難き御世に生れ、そして育てられし広恩、必死、必中、唯これを以て報いんのみ。

思えば大空に志し、翼の生活に入り、早六歳。昨年より特別攻撃隊の熱望三度にして、漸く希望入れらる。神我を

んだとて魂はいつまでもいつまでも生きて居ります。

兄さんと新平の魂は何時でもお父さんお母さんを見守って居りますよ。

二人とも子供を失ったと言って悲観したりしてはいけません。兄さんだつて随分と増産には働かれたのだし、新平だつて今までに相当に空中戦士を養成しましたし、今度は軍人の最高名誉たる特別攻撃隊の一員として悠久の大義に生きるのです。

こんな目出たい事はありませんよ。新平、米英艦隊に命中の報が有りまして、お父さん新平の陰膳相手でお酒でも飲んで下さい。

そして余生を文夫や洋治相手に楽しく送って下さい。洋治と言えば名前も本当に小生とゆかりの深いものとなりました。

四月一日

訓練も本格的段階となる。

必死。必中。一言に言えば簡単の様だが、仲々困難な任務だ。

一分間に十万発も射つだけの火炮が、空母一隻だけでも持っている。必死は簡単なれど、必中は確かにむずかしい。だが吾に不撓不屈の強靱なる意志あり。大艦船一隻とさし違い、思っただけでも痛快事だ。ニュースの報ずる所に

よれば、沖縄附近にも未だ三百隻とか。まさに神機到来。

吾々も本日の命令で愈々四日前進基地へ進発との事。

この世にあるも後数日だ。なんだか嘘の様だ。死なんて事は一向にピンとこない。

任務の重大な為だろうか。それ共知らない内に修養が出来たのかも知れない。

午後飛行機受領に航空士官学校に行く。

偶然にも館林時代の中野少尉、尺八の恩師柳原少尉に会う。どこで聞いたのか、お目出度うと言われ、さんざん羨しがられる。

愈々全機揃う。訓練も一通りは終る。

後は隊長を核心とする鞏固なる団結を以て必殺の命中を敢行するのみだ。

お母さん江

思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、又何時も不平ばかり言ったり。

眼を閉じると子供の頃のこと、不思議な位ありありと頭に浮んで参ります。悪いことなどすると神様に謝らせられたり、又幼い頃「今日の良き日をお

守り下さい」「今日の良き日を有難うございました」と毎日拜神のことをやかましく言われたお母さんでした。

今日になり本当にあの頃からのお母さんの教育がどんなにか新平の爲になつた事でしょう。病気で心配をかけたたり、又苦学の時も随分と心配をおかけしたり。

苦学と言えば、家を出発する時、台所でお母さんが涙を流されたのが、東京にいる間中頭に焼きついて、あの頃どんなにかかえりたかつた事かしれませんでした。

お母さんの本当の有難味が解つたのは東京へ出てからでした。あれから余りに居る事もなく、ゆっくりお母さんに親孝行をする機会がなかつた事だけ残念です。

軍隊に入つてお母さんにお会いしたのは三度ですね。一度は去年の休暇、二度目は去年の暮近く館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

態々長い旅をリュックサックを背負つて会いに来て下さつたお母さんを見、何か言うとも涙が出そうで、遂、わざわざ来なくても良かったのに等と口では反対の事を言つて了つたりして申し訳ありませんでした。

あの時お母さんと東京を歩いた想い

出は、極楽へ行つてからも、楽しいなつかしい思い出となる事でしょう。

あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ今年新平が祀られるのですよ……。手をつないでお参りしましたね。今度休暇でかえつた時も、お母さんは飛んで迎えに出て下さいましたね。

去年の時もそうでした。

四月二日

午前、立川へ夜間装備に行く。

沢山の見送りを受け、壬生飛行場へ生地着陸に行く。館林時代の村松、大沢少尉に会う。他二十名位、なつかしき。又、谷口曹長には実に那須以来三年ぶりにて会う。

此処でも大勢の見送りに送られ感無量なり。十六時より一日の外泊許可になり、家へもかえれず館林へ行く。

家富の小父さんと一献傾け十一時になり、遂、小父さんの家に泊る。

四月三日

五か月ぶりで館林教育隊を尋ねる。

工員学生諸氏皆昔の顔ぶれなり。皆に壮途を祝さる。

松沢、佐藤学生の家で馳走になり、早川の家へもお別れに行く。

館林は在住一年九か月、一番長く在住せし所なれば世話になりし家も一番

多し。

齊藤本屋の小母様の所でも御馳走になり、わざわざ駅まで送って下さり、涙を流されたのには感謝の言葉もなし。思えば館林在住間、何時も特別の款待を受けた小母様だった。

両親の如く面倒を見て呉れた小母様御恩の数々唯大きな戦果で報ゆるのみ。松沢学生、斎藤齒科医の小父さん、家富さんから過分の餞別を頂戴する。十五時館林出発、東京華岳叔父様の所へ行く。頂度郷里からかえられた所で。

種々、話に花を咲かす。九時頃まで飲み帰る。お父さん、お母さん、おやすみなさい。

四月四日

愈々明日出発。御両親様、日誌を今日で終わります。種々の御高恩、充分の事も出来ず申し訳ありません。

本日荷物等発送の手順をとりました。小生の写真等フィルム、もり枝さんの所へやりますから後でもらって下さい。

種々書きたい事のみですが、いくら書いてもつきませんからこれで止めます。

二十五年間本当に有難うございました。どうぞ御体には呉々も御注意なし天寿を完うして下さい。

父上様へ

お父さん、新平、日露戦争へ行かれたお父さんの子供として恥ずかしくない死場所を得ました。お喜び下さい。我が仮者の新平、子供の頃から何時も心配ばかりおかけし申し訳ございませんでした。

御恩返しに、うんと親孝行しようと思いましたが、結局何も出来ずにしまいました事をお許し下さい。

随分大きくなるまでお父さんと一緒に寝た新平は、幼い頃お母さんに、お前はお父さんの子、文吾は俺の子等と言われたものでした。

厳格な半面、子供の時から人一倍可愛がって頂いた新平は本当に幸福でした。

酒に酔われて義太夫や踊をやられたお父さんの昔の姿がなつかしく思い出されます。

どうぞお父さん何時までも御壮健で文夫や洋治を可愛がって下さい。

書きたい事はいくらもありますが、日本一のお母さんを持った新平は常

に幸福でした。

小雨の降る夕方、お母さんと一緒にかこちゃんのお母さんのお墓参りをした事、愛国婦人会の事で在郷と一緒に歩いた事、天神様へ成績の御知らせに行った事等楽しい思い出は次々とつきません。

特攻隊の事も早く知らせて呉れ、ば、手紙でも出して激励してやったのに、とお母さんは残念がるかも知れませんが、お母さんの気持ちは新平解り過ぎる位解って何時も感謝して居りますから、余計な事を心配しないで下さい。

私としてはどうせ直ぐ解る事ですから、早く知らせて心配かけてはと思って知らせなかったのですから、悪く思わないで下さい。

リウマチや、神経痛に充分注意して、天から与えられた寿命だけは絶対に生き延びなければいけません。

文夫、洋治もお母さんがよく見守って立派な子供になる様鍛えて下さい。

決して気を落したりして、体をそこねられない様御注意下さい。

お父さんの方が後になり変になりました。

一足御先に失礼します。今晚、隊の壮行式があり、一寸酔って居りますので字も乱れて居ります。河野、小林先生にも宜敷く願います。

たします。

小生必ずや大きな戦果をあげて見せます。

沖繩沖の戦果にご期待下さい!!

四月五日 朝

出陣ニフサワシク快晴デス
愈々本日本日十二時出発デス
必ず轟沈致シマス
御両親様ノ多幸ヲ祈リマス
出陣ノ朝 新平
遺書ハトランクノ中ニ有リマス

遺書

天皇陛下万歳、
大命ヲ拜シ、新平只今特別攻撃隊ノ一員トシテ醜敵艦船撃滅ノ途ニ就キマス

日本男子トシテノ本懐コレニ過グルモノハゴザイマセン
必中必沈以テ皇恩ニ報イ奉リマス
新平本日本日ノ榮譽アルハ二十有余年

ニワタル間ノ父上様、母上様ノ御薫陶ノ賜ト深く感謝致シテ居リマス

新平肉体ハ死ストモ魂ハ常ニ父上母上様ノオ側ニ健在デス父上様モ母上様モ御老体故呉々モ御体ヲ大切ニ御暮

シ下サイ決シテ無理ヲナサラヌ様デハ

日本一ノ幸福者、新平最後ノ親孝行
ニ何時モノ笑顔ヲ元氣ヲ出発致シマス
親類ノ皆様方近所ノ人達ニ宣敷ク

御両親様

新平拜

辞世

身はたとへ敵艦船と砕くとも

七度生きむあかきころは

ありがたき御代にうまれてやくだてる

そのよろこびにわれはゆくなり

御両親様へ

うみやまにまさるめぐみにむくひなむ

道をゆくなりいさみいさんで

亡き兄さん江

極楽の

兄弟酒を

偲びつつ



鷺草の花 (會員本城正八郎氏撮る)

殉義隊隊長 敦賀良二中尉のこと

陸士56期生史「留魂」に殉義隊が水戸飛行場を出発する場面、就中敦賀隊長のことについて、次ぎの通り載っている。敦賀中尉は19年12月21日ミンドロ島近海の敵艦に突入散華している。

式場には、すでに多数の各隊の見送りがあり、そして、その一方には、特攻機が、ズラリと並んでいた。

将校集會場で乾杯を終えた敦賀隊長以下の勇士が到着した。宮城遙拜、部隊長訓示があり、次いで敦賀隊長が発の申告をした。そのとき敵砲さ、美しさに私は、幾度か何か叫びたいような衝動にかられた。

万歳三唱が終わったとたん、敦賀隊長の太刀が一閃すると、勇士の隊列が、サッと解けて、それぞれ愛機に駆けつけた。

静から動へ、この散開は、パッと花が散ったようで、美しくもあり、身内がゾクゾクするほど勇ましかった。

各機のプロペラが猛然と唸り出す。ただ一人、敦賀隊長だけは、全機が一望に見渡せる位置に出て、地についた刀に両手を重ねて立っている。その巧まぬポーズの美しさ、凛々しさ、気高

さ。

隊長機は、代わりの将校がエンジン調子を調べていたが、全機、異常無しとみると、隊長は身を纏して愛機に馳せより、たちまち機上の人となった。このとき、私は思いがけない光景を見た。

機上の人となった隊長が、身体を少し後ろへ捻じまげて、機の直ぐそばに、いる少年整備兵の一人一人に、心のこもった、慈愛に満ちた「さようなら」をした。

細かく前後に振る拳手と頭とは、「体を大切にしろよ。忠節を忘れるなよ」と、囁んで含めるように言っている。

たまりかねた少年が、ツと機上に駆け上ると、いま、拭いたばかりの風防ガラスを、もう一度拭き始めた。手は拭いているが、顔は隊長を見ている。私は、堪え切れずに泣いた。

『もうよい、もうよい』と隊長が合図すると、少年は下りた。と同時に、隊長の右手がサッと高く上がると全機の爆音が天地を截って音をたかめ、隊長機が、スルスルと迂りだした。つづいて二番機、三番機、右転して、遙か彼方の滑走路へ——。息つくひまもない、鮮やかさであった。

敵機が動き初めたころ、隊長機は

もう滑走路に移っていた。またたく間に、全機が飛び上がった。そして大きく半円を書くときみるまに、見事な編隊となつて、再び、われわれの頭上に最後の美姿をあらわした。どの機も、そろって翼を振っている。

地上では、旗と帽子の大波が揺れ、歓喜の声が大空へと怒濤の如く轟きわたる。

編隊は、そのまま真一文字に南へ……、永遠を貫く歴史の中に封じ込まれた。(以上、敦賀中尉の最後を見送った伊原宇三郎画伯の手記より)

敦賀真二君は、遺書の最後に、次ぎのように書きしるした。

露ほどの命捧げて大空に
醜の御楯と散るぞうれしき
私は、常に大空とともに生きています

神秘的宇宙、澄みきった秋の空
じっと空を見つめる
青空、白雲

そこに、私は微笑んでいます

前号の誤植、お詫びして訂正します

。12頁2段目増田利男(三十一歳)は(二十一歳)に訂正

。26頁の投稿者五反園敏男とあるは六反園敏男に、済みませんでした

戦没特攻隊員の 我が子に与えた遺書

航空特攻で散華した人は年若く、殆どが独身で妻子のある人は極めて少ない。こゝに三件ばかり我が子に対する遺書を紹介しよう。

久野正信陸軍中尉

義烈空挺隊の中の第3独立飛行隊、少候22期、29才、練達の操縦者で嘉手納に向う四機の編隊長だった。5月24日健軍を発進、嘉手納には一機着陸コースに入ったことまで確認されているが、その後の状況不明。米軍資料には読谷には強行着陸が成功したことが載っているが、嘉手納については何も載っていない。この人は出撃時は中尉だったが、戦死認定が全員6月15日なので、それまでに大尉に進級し、死後中佐に特進している。余談ながら奥山隊長(53期)も同じような取扱で大佐となっ



久野正信中佐

正憲、紀代子へ

父ハスガタコソミエザルモイッデモオマエタチヲ見テイル。ヨクオカアサンノイイツケヲマモツテ、オカアサンニシンパイヲカケナイヨウニシナサイ。ソシテオオキクナツタナレバ、デブンノスキナミチニス、ミ、リッパナニッポンジンニナルコトデス。ヒトノオトウサンヲウラヤンデハイケマセンヨ。「マサノリ」「キヨコ」ノオトウサンハカミサマニナツテ、フタリヲジツト見テイマス。フタリナカヨクベシキヨウヲシテ、オカアサンノシゴトヲテツダイナサイ。オトウサンハ「マサノリ」「キヨコ」ノオウマニハナレマセンケレドモ、フタリナカヨクシナサイヨ。オトウサンハオオキナジュウバクニノツテ、テキヲゼンブヤツケタゲンキナヒトデス。オトウサンニマケナイヒトニナツテ、トウサンノカタキヲウツテクダサイ。

父ヨリ
マサノリ

キヨコ

フタリへ

ている。

久野中尉には五才と三才の幼児がいた。なるべく早く読めるようにと片仮名で認めてある。

植村眞久海軍少尉

第1神風特攻攻撃隊大和隊、19年26日爆装零戦に搭乗、セブ基地発進スリガオ海峡附近で敵艦に突入
海軍飛行予備学生13期 25才



植村眞久少佐

素子

素子は私の顔をよく見て笑いましたよ。

私の腕の中で眠りもしたし又御風呂と一緒に入った事もありました。

素子が大きくなって私のことが知りたいときは、お前のお母

さんか佳世子叔母様に私のことを良く御聞きなさい。私の写真帳も御前の為に家に残して在ります。

素子と言ふ名前は私が付けたのです。

素直な心のやさしい思ひやりの深い人になる様にと思つて、お父様が考へたのです。(略)

私は御前が大きくなって、立派な花嫁さんになって、幸になるまで見届けたいのですが、若し御前に私を見知らぬままにしてしまつても決して悲しんではなりません。御前がおおきくなつて父に会ひたいときは九段(註・靖国神社のこと)へいらつしゃい。そして心に深く念ずれば必ず御父様の顔がお前の心の中に浮びますよ。

父は御前は幸せ者と思ひます。生まれながら父に生写しだし、

他の人々も素子ちゃんを見ると眞久さんに会つて居る様な気がするのと良く申されて居た。又御前の御祖父様御祖母様は御前を唯一つの希望にして御前を御可愛がり下さるし、姉様も又御自

分の全生涯をかけてただただ素子の幸せをのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一の事あるも親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身辺を護つて居ります。先に言つた如く素直な人に可愛がられるやさしい人になつて下さい。

お前がおおきくなつて私のことを考へ始めた時に、此の便りを読んでもらひなさい。

昭和十九年〇月吉日

父

植村素子へ

追伸 素子が生れた時オモチヤにして居た人形は御父様が戴いて自分の飛行機に御守り様として乗せて居ります。だから素子は御父様と一緒に居たわけです。素子が知らずに居ると困りますから教へて上げます。

父

素子殿



出撃前、愛児素子さんを抱いて

渋谷健一 陸軍大尉

第64振式隊隊長 20年6月11日、万

世より出撃、同隊9人(九九襲9機)

沖繩近海の敵に突入

少候22期少飛3 31才



渋谷健一 中佐

父より倫子並に生れる愛子へ

父は選ばれて攻撃隊長となり、隊員十一名、年齒僅か二十才に

足らぬ若桜と共に決戦の先駆となる。死せずとも戦に勝つ術あらんと考ふるは常人の浅はかなる思慮にして、必ず死すと定まりて、それにて全軍敵に総体当りを行ひ、尚且つ、現戦局の勝敗は神のみぞ知り給ふ。真に国難といふべきなり。父は死にても死するにあらず、悠久の大義に生るなり。

一、寂しがりやの子に成るべからず母あるにあらずや、父も又幼少にして父母を病に亡したれど決して明るさを失はずに成長したり。まして戦に出て壮烈に死すと聞かば日本の本の子は喜ぶべきものなり。父恋しと思はば、空を視よ、大空に浮ぶ白雲のりて父は常に微笑で迎ふ。

二、素直に育て、戦勝つても国難は去るにあらず、世界に平和がおとづれて万民太平の幸をうけるまで懸命の勉強をすることが大切なり。二人仲良く母と共に父の祖先を祭りて明るく暮らすは父に対して最大の孝養なり。

父は飛行将校として栄の任務を心から喜び、神明に真の春を招

来する神風たらんとす。皇恩の有難さを常に感謝し世は変るとも忠孝の心は片時も忘るべからず。

三、御身等の母はまことに良き母、父在世中は飛行将校の妻は数多くあれども、母程日本婦人としての覚悟ある者少し。父は常に感謝しありたり。

戦時多忙の身にして真に母を幸福にあらしめる機会少く、父の心残りの一つなり。御身等成長せし時には父の分まで母に孝養つくさるべし。之父の頼みなり現時敵機爆撃の為大都市等にて家は焼かれ、父母を亡ひし少年少女数限りなし。之を思へば父は心痛極りなし。御身等は母、祖父母に抱かれて真に幸福に育ちたるを忘るべからず。

書置く事は多けれど、おおきくなつた時に良く母に聞き母の苦勞を知り決して我儘をせぬやう望む。

特攻隊絵葉書発刊に因んで⑤終

それらの絵にひそむもの

田中賢一

沖繩戦航空特攻

八枚一組になっている特攻隊絵葉書のうちの一つに「沖繩戦航空特攻」と題する一枚がある。これについては、先ず画いた人西野弘二（陸士52期）について説明せねばならぬ。西野少佐は沖繩の第32軍参謀部付として20年3月11日に着任した。西野少佐の専門は飛行場設定だったが、着任早々既設飛行場破壊の計画を作らねばならなかったという。その後は軍司令部にあって、

参謀の補助として働き、最後は軍司令官や参謀長の自決にも立会った。長参謀は自決する前に八原参謀以下数名に、司令部壕を脱出し国頭地区に潜行するよう命じた。西野少佐もその中の一人だった。彼は住民の服装で昼は洞窟に隠れ夜陰にまぎれて北上したが、数日後遂に正体を見破られて捕えられた。このような次第で、彼は貴重な生証人となった。

戦後は黙して語らず、電気器具商で生計を立て、傍ら彩管を執っていた。

自ら体験した沖繩戦の油絵の大作をものし、平成6年銀座で個展を開いたりした。

その中の一点が絵葉書にしたものの原画

である。実はこの絵には「敵艦嘉手納沖に現ると」と添書がしてあり、次に引用する本人の文章に即して、この絵を絵葉書に採用したのである。本人は昨年5月に逝去して、絵葉書を作るときには既に故人だった。もう一点「炎の特攻機」と題する大作があり左に掲げるが、カラー印刷できないので残念ながら実感をお伝えできない。



西野は平成6年になって、漸く沖繩戦の体験記を一書にまとめ、「紅焰」という書名で世に問うた。その本に自分の中飛行場（嘉手納）に3月26日誠第32飛行隊を迎えた場面、及びその翌日この部隊の突入を首里高地で目撃した情景が、生々しく述べているので、

こゝに転載する。

西野弘二著「紅焰」の一節

神風特攻隊が来るぞ。26日中飛行場に到着する予定だ。この特攻隊を指揮する任務を受けている神航空参謀は夕方近く首里を出発して、自動車で一時間かかる中飛行場に向かった。私も随行する。田舎道をがたつかせながら走るうちに途中で暗くなった。暗くなくても敵の夜間戦闘機のような奴が飛んで来る。時々相当低い高度で道路上も襲うように飛ぶ。敵機の行動の隙間を縫い飛行場に着いた。滑走路近くの茅葺きの戦闘指揮所で飛行場大隊長の野崎大尉以下が出迎えていた。特攻機の到着に備えて誘導準備をしている。参謀は大隊長に言った。

「御苦労様です。到着が少し遅いようですね。しかし今夜は必ず来ます」

大隊長は誘導準備や特攻隊出陣式の準備の完了について説明した。

夜は全く暮れた。星は満天に輝いている。だだっぴりい野原の飛行場の真ん中にあるがらんとした一軒家の指揮所で、十数名の者は我が機の爆音は今か今かと耳を澄ましている。南の方からグワングワンと遠い砲声が時折聞こえるだけで寂しいばかりに静かだ。二つ、三つ黒い人影が茅葺きの家の回り

を静かに動いている。時計は二三・〇〇を回っているが到着しない。或いは予定が変更になったのか。途中で機動部隊の敵機にでも捕捉されたのではなからうか。

皆は心配し出した。参謀は一応飛行場から五軒ばかり離れた地区司令部に引き揚げ、今後の戦闘について色々地区司令官と協議した。もうあきらめた頃だ、と爆音らしいものが聞こえるぞ。自動車のエンジンの音か？ 爆音だ！ 爆音だ！ 来てくれたか！ 中飛行場からの電話だ。特攻機安着、我々は早速飛行場に走った。

飛行場の平坦な滑走路に続いた野原の一軒家、燈火管制のため外界は闇だ。真っ黒な巨影が地表に浮いて見える。戻って見ると特攻隊員達は先着して整列して参謀を待っていた。今この孤屋の中で敵軍の神の儀式が行われ始めた。部屋の中の長い机の向こう側に勇士達が並んでいる。数本のローソクの光が紅顔の青年達の顔を煌々と映し出す。11名の顔は若さに輝いているが、彼等の目は射るように鋭い。ローソクの焰は時々揺らぐ。人々の影が大きく揺れる。精魂の集い来たった殿堂のためか、神秘に近い空気が部屋を満たした。神の儀式といわずして何と言おうか。参謀の声は低い、部屋の空気に一言一

つ、三つ黒い人影が茅葺きの家の回り

を静かに動いている。時計は二三・〇〇を回っているが到着しない。或いは予定が変更になったのか。途中で機動部隊の敵機にでも捕捉されたのではなからうか。

皆は心配し出した。参謀は一応飛行場から五軒ばかり離れた地区司令部に引き揚げ、今後の戦闘について色々地区司令官と協議した。もうあきらめた頃だ、と爆音らしいものが聞こえるぞ。自動車のエンジンの音か？ 爆音だ！ 爆音だ！ 来てくれたか！ 中飛行場からの電話だ。特攻機安着、我々は早速飛行場に走った。

言食い込んで行く。特攻隊に命令は下された。

命令

「誠攻撃隊は明払曉本島西海及び慶良間列島の敵大型船を求めて必ず撃沈すべし。

赤心隊は司偵一機を出し同攻撃隊の誘導並びに戦果確認に任ずべし」

文中にある11人の特攻隊員

(誠第32飛行隊)

中尉広森達郎	陸士56	大10	生れ
少尉清宗孝己	特操1	大7	
少尉林一満	幹候9	大11	
軍曹今西修	都城14	大15	
軍曹今野勝郎	仙台14	大14	
軍曹島田貫三	印旛14	大14	
軍曹出戸栄吉	古河14	大13	
軍曹伊福孝	少飛15	大15	
伍長大平定雄	印旛14	大14	
(赤心隊)			
軍曹谷川広士	少飛9	大14	
伍長三竹忍	昭16	大8	

註 都城仙台等は乗員養成所のこと

嗚呼悲愴鉄血の命令は下った。広森特攻隊長は澄み切った声で任務を復唱

した。私の気が動転したのか、誰かが、あなた方に続いて私も最後に特攻隊となって出撃する、という声が幻覚の中にごだまして聞こえたように思えた。脳裡にこの幻覚がこびりついた。もし仮に私が命令する立場に立たされた場合、どういふことになったろう。果たして命令出来たろうか。(中略)

地図を広げて敵艦隊輸送船の配置が説明された。本島東南八十軒に航空母艦を基幹とする機動部隊数群、湊川南方海上約二十軒戦艦以下十数隻、慶良間海峡に航空母艦以下数十隻、那覇正面戦艦以下数十隻。特攻隊員は地図を囲んで銘々どれに突っ込んでやろうかと考えを練っている。隊長広森中尉は士官学校卒業の56期生、若冠23歳の若武者である。隊長は隊員に明日の突入部署を命じた。

「離陸は〇六・〇〇、第一編隊は本島西海岸を低空で南下し、慶良間の敵艦を。第二、第三編隊は隊長直率し本島西海の敵に突入」と。その後隊長は隊員に突入時の注意を平素教育しているのだから、最後の任務を立派に果たすため細心に行った。隊長は皇国の不滅を信じ、我々の任務達成により戦勢挽回の糸口となれば幸甚であると結んだ。

私は19年末発行の『日本評論』であっ

うつつのものとは思われなかったに違いない。

翌朝〇六・〇〇に特攻隊が出撃する。我々は深夜の道を軍司令部に向かつて急いだ。

27日の朝はほのぼのと明け始めた。首里城址の藪かげに身を隠して水平線の彼方を見張った。朝凧にちぎれ雲が中空にかかって動こうとしない。明け空は薄い紅化粧だ。油鏡のような海面も漸く朝の眠りから醒めたようだ。東には中城湾、南には島尻半島がぐうつと足を伸ばしている。島尻の向こう水平線には慶良間列島が横に長くのしかかっている。その間には敵の戦艦二十数隻、朝霧の中に散見する。西南足下の低地は去年10月10日の空襲で灰燼に帰した人影のない焼野が原の那覇の街跡、西は東支那海。悠々と一列縦陣で巨艦が波をけて北行している。更に右に目を転ずれば北、中飛行場が森の中に赤肌の地面を晒している。朦朧とした朝の包みは未だとぎさされたままだ。我々は〇六・〇〇を息をこらして待つ。軍司令官等も山頂に居られる。敵機は未だ一機も飛んでいない。

数分後の彼等の鉄槌を敵艦は御存じない。大地を揺り動かすような爆音が

北から湧いて来た。怒りの爆音は、お、西海岸沿いを超低空で三機編隊、矢のように飛んで行く。くつきり見える日の丸の印、もう一組が海上に小さく電光のように天翔けている。旭光に照らされキラキラ反射する。天翔ける神々だ。頭が下がる。莊嚴の極み。武人的表現をすれば衆人環視の内に栄えある駒を進めるといふことだ。突然グワングワンバリバリ、グワングワンバリバリ、大海は早太鼓を打つように猛然とうなり出した。その音は遠く深く海の彼方にこだまして、——敵艦隊の対空砲火だ。嗚呼我が神風特攻隊に幸あれ！

やった！慶良間の沖に火柱がパツと上がった。グワイン！爆裂音が余韻を引いて海からやってくる。また上がった。火柱、黒煙、濛々茸のような黒い煙柱が水平線上に立ち登った。次々に十一本の火柱、何本かは瞬時に消え今まで見ていた艦影もなくなった。撃沈だ。撃沈だ。敵は余りにも脆く沈没してしまつた。

戦は瞬時に終わった。今戦のあつた鏡のような海の面には未だ炎々と六つの火柱が立ち、黒煙は高く高く天にうなぎ登りに登っている。敵にとつては突然の余りにも無残な出来事だつた。敵は早朝から奇襲の強打を受け驚愕し

たに相違ない。海上に火をふいて沈みかけている軍艦の外には一艦も見えなくなつた。蜘蛛の子を散らすように我が視界の外に逃げ去つた。広森達郎中尉ら11名、11機の特攻機は五百疋の爆弾を抱きガソリンを満載して敵艦に体当たりをして数隻の敵艦を撃沈し、或いは大破せしめた。英魂よ、これからの我等の戦いを照覧下さい。(以下略)



絵葉書の原画、カラー印刷は絵葉書で

茨城県護国神社みたままつりに 特別攻撃隊慰霊顕彰絵画展はる

8月2日茨城県遺族連合会の要請により、30点余展示しました。松本・中江・伊藤らは宇佐美哲司氏に迎えられ、参集殿にて遺族連合会の主旨組織活動状況の説明を受け、会の「50年の歩み」なる大冊を頂き深く感動すると共に敬服しました。連合会は、会長の下壮

年部と婦人部があり、社前会場は献灯提灯が数百飾られ、盆踊舞台があつて、20米突余の猛宗竹の飾りが建つており、売店生野菜の即売店等総て分担業務がきまつておるらしく、皆黙々として立ち働いて居られる姿を拝見し、感激し、敬服しました。農家の働手一家の柱である父や兄を失つたご遺族のご心中は、戦争を恨み悲しみ居られるものと推察していたが、みたままつりを迎える此の姿は、父や兄は無駄に戦死したのではない

国家の在亡の重大なる折、アジアの八紘一字のため命を捧げ戦死したのであると、確固たる意識を持つて居られると確信しました。流石「水戸ッ兒」水戸学のお膝下、徳川光圀公の大日本史、藤田東湖の正気歌の地、先祖代々より培れた永い歴史と共に傳つた血脈と感ぜました。

歴史と伝統を粗末にする現今世相に

あつて、他府県に見られない光景でした。吾々の絵画、遺詠も社前に近く最も見易い場所に展示され嬉しいことでした。

今迄靖国神社社頭のみ展示して早くも六年を経過し、次第に巷間の伝える処となり、水戸の地まで来て展示し、更に旧鹿島海軍基地迄展示できた事は更に意義深く、今までの苦勞は忘れ更には強くなり、頑張らねばならぬと感じました。

8月9日長距離を自家用車を走らせ靖国倉庫迄運んで頂き、謝礼やら新鮮なるピーマン四函にトマトを頂戴し、恐縮しました。吾々はこの仕事を永く続け、特攻烈士の精神を一層深く現世代へ伝え、乱れた日本の警鐘とならねばならぬと思ひました。

その後、茨城出身特攻戦没者ご遺族、住所、氏名、部隊名、戦死月日をお知らせした所、早速会員五名集り水海道第45振部隊藤井一少佐のお墓参りに行かれ、更に弟さん宅に寄られたとお知らせを受けました。ご遺族がご遺族をご訪問感激されて全く敬服しました。次には海軍60名余のご遺族住所を調査しお知らせ致さねばと思ひます。

9月初頭の集中豪雨利根川の氾濫農家の被害などテレビで見、若ければボランティアとして救援に行き、ご遺族の心を慰めたいと思ひました。伊藤直之記

靖国神社 八月拝殿に掲示された 昭和天皇の御製を拝誦し

樺太に 命をすてし たをやめの
ころを思へば むねせまりくる

昭和43年稚内公園に行幸せられた折
にお詠みになった御製である。

我が国が無条件降伏した後の8月20日、ソ軍は不法にも艦砲射撃の後真岡に上陸してきた。同地に在った歩兵第25聯隊第1大隊長は、軍使を派遣したが、一行はソ連軍に射殺されてしまった。上陸したソ連軍は住民に対し機関銃を乱射し、阿鼻叫喚の状態に陥った。無辜の同胞が殺戮せられる惨状を見た部隊は、ソ連軍に対し射撃を開始し、ここに本格的戦争が始まった。このときの出来事である。

真岡郵便局女性交換手の精神は、国に殉じた特攻隊員と何ら変わることはない

靖国神社遊就館では7月1日より来
年1月31までの間、戦没女性御祭神の
遺品展が行われているが、真岡郵便局
で職に殉じた九人の交換手の写真が展
示されていて、それについての説明文

は次の通りである。
北海道最北の地、
稚内。遙かに樺太を
望む丘の上に「氷雪
の門」が建っている。
この門は終戦時非命
に斃れた樺太島民の
慰霊碑である。この氷雪の門に寄り
添うように「九人の乙女」の像があ
る。高さ一・八メートル、巾二・四
メートル、登別石の屏風情の碑には
交換手姿の乙女像の銅板レリーフが
はめ込まれ、「皆さんこれが最後で
す。さようなら、さようなら」の最
後の言葉が刻まれている。

昭和天皇・皇后両陛下は、昭和四
十三年九月二日札幌で開催された北
海道百年記念式典に御出席なられ、
式典後北海道各地を御視察途次、同
月五日「九人の乙女の像」の前にお
立ちになり、稚内市長の説明を受け



られた。後日、昭和天皇はこのとき
のご感慨をこのようにお詠みになら
れたのである。

同時に皇后陛下下よりも

樺太に露ときえたるをとめらの
みたまやすかれとただいのりぬる
の御歌を賜っている。この御製と
御歌を刻んだ碑は、翌四十四年八月
「乙女の像」の辺りに建立された。

八月八日対日宣戦布告、九日北緯
五十度の国境線を突破したソ連軍の
動きに対し、樺太庁は急遽在留邦人
の本土への緊急疎開を決め、六十五
歳以上の老人、十四歳以下の子供及
び婦女子の引揚を開始した。しかし
当時交換業務を直ちに男子に代換す
る準備が急遽に整はないことを察知
した真岡郵便局の交換手たちは、ほ
んど全員自ら進んで残留を申し出
た。互選の未通信確保のため最小限
度二十名が決死隊として踏み留まる
ことになった。

八月九日、日ソ不可侵條約を一方
的に破って参戦したソ連は北緯五十
度の国境線を突破、怒濤の如く南下
を開始した。そして、八月十五日終
戦。しかしソ軍の侵攻はやまなかつ
た。むしろその侵攻は激しさを加え
た。戦禍に追はれた罹災者たちは長
蛇の列をなして真岡の町をめざした。



八月二十日、霧の深い早朝真岡の
沖にソ連艦隊が現れ、艦砲射撃を開
始した。街は焰に包まれ戦場と化し
た。上陸したソ連軍は海上の艦隊と
呼応して砲火を浴びせつつ、町内に
侵入して来た。この時、高石キミ電
話主事補以下八名の当直者と、二十
日局からの連絡を受け駆けつけた志
賀晴代電話事務員の計九名が局にい
て交換台に就き、時々刻々緊急情報
連絡と交換業務に狂奔していた。や
がて二階の交換室の窓越しに見る街
には、激しい銃声とともに恐ろしい
ソ連兵が押し寄せて来るのが見え、
間もなく局舎に侵入してくるに及ん
で万が一を慮り服毒自殺をとげたの
である。

時は流れて五十余年、今も「乙女
の像」は真岡を望もうとするかのよ
うに立っている。しかし多くの人は
その事実を知らない。一人でも多く

の人々がこの受難史を知り、彼女たちを始め樺太で散った多くの同胞たちの冥福を祈りたい。

彼女たちは昭和四十八年三月三十一日、戦没者叙勲として勲八等宝冠章を授与された。

「樺太終戦史」(同刊行会編)には、次の通り記載されている。

交換手の集団自決
宗谷海峡を見下ろす稚内の丘の上、

氷雪の門のそばにプレストを耳にあてた女性のレリーフと「皆さん これが最後です さようなら さようなら」の文字を刻んだ「殉職九人の乙女の碑」(寄贈上田祐子、制作本郷新)がある。

ここに死をたたえられている九人は真岡郵便局電話主事補高石ミキ(二四)可香谷シゲ(二三) 電話事務員吉田八重子(二二) 滋賀晴代(二二) 渡辺照(二七) 高城淑子(一九) 松橋みどり(二七) 伊東千枝(二二) 沢田君子(一九)で、上田豊蔵局長がその死を確認したのは三日後の二十三日午後だった。上田局長はこれよりさき二十日、郵便局に駆けつける途中、局舎を目前にしながらソ連軍の激しい銃戦が進めず、腕には貫通銃創うけ、捕らえられて海岸の石炭倉庫に連行された。同倉庫には血みどろの負傷者が多く、二十

一日朝まで腹部を撃たれた十人ほどが絶命したこと、他の負傷者に治療を受けさせたいとソ連軍と交渉、ひとまず由田与三吉在郷軍人分会長と監視兵に付き添われて庁立病院に向かう途中、駆け寄ってきた交換手の一人が

「高石らさんら宿直の交換手全員が自決したらしい」という両眼に涙があふれ「局に近付けないので確かめることはできない」といったきり、監視兵がわめくような声でどなったため、その交換手は離れていったが、同局長は病院にはいったあと、見舞ってくれた知人に頼み、電話監督の鈴木かづえに連絡をとったが、二十二日朝、病床をたずねてきた鈴木は沈痛な表情で「当夜の当直者が自決したことは確実と思う」と、次のように推測を語った。

「まず、宿直者の一人川島キミ子さんが、高石さんの命で、電話連絡のつかない地域に非常呼集を伝達するた

め外出し、局に帰ることができなかつたが、川島さんが『高石さんは、万一の場合自決する考えらしい』と話していたこと。渡辺照さんは非番ながら直ちに駆けつけたことがわかつているが、その渡辺さんを含めて、当夜の交換手の姿を見かけた人がいないこと、さらに交換手のほとんどが万一の用意に工

務の技術官駐在所から青酸カリを手に

入れていたこと、の三点から自決したとしか考えられない」

鈴木監督の話して上田局長は、自決がほんとうのことのように思ったとい

う。

八月十六日、上田局長は豊原通信局から女子職員の疎開が命じられた。同局長はこのことを知らせ、あとの交換業務を真岡中学の一、二年生五十人を急ぎ養成することで谷内同校長と話

合った。ところが担任の大山一男主事が「全員、疎開せず局にとどまると血書嘆願する用意をしている」と局長に報告したため、局長は疎開するよう説

得したが応じなかった。「私は感動した。しかし、その決意を容認してはならないと思った」と上田局長は語る。

中学生に業務を教えるため二十人だけ残すことにし、それも通信局伊賀業務課長との相談で、通信省の小笠原丸(海底電線敷設船)が大泊一稚内間を一運航のち真岡に回航、西海岸の通信女子職員の疎開輸送に当らせる了承を得た。同船が入港したら命令で乗船

させるつもりだった。

はいることを懇願、翌二十三日昼少し過ぎ、その将校のあとに従って局舎に向かった。局長は医師の白衣を借り、鈴木監督と電信の女子事務員斎藤は看護婦の白衣の胸に赤チンキで十字のマークを描いてまとった。

三人は局舎にはいると廊下を小走りに抜け薄暗い階段を掛けのぼり、交換室の戸をあけた。その目に真っ先に映ったのは監督の机の前に倒れている高石の遺体だった。机上には二十日の交換証のつづりと事務日誌がきちんと重ねられ、そのわきに睡眠薬の空箱が二つ

ころがっていた。

また、吉田交換手は市外交換台にプラグをにぎったままうつつ伏せ、隣の市外交換台前ではコードをつかんだ渡辺が横倒しのイスにおおいかぶさるようにして死んでいた。この二人はプレストを頭につけたままで、最後まで他局からの呼び出しに応ずるため交換台にしがみついていたのである。可香谷、

伊藤、沢田、高城、志賀の五交換手は監督台と東窓に沿って並んでいる交換台のほぼ中間に倒れ、ただ一人、松橋

交換手だけが南に面した窓際にあった。

私たちはあふれる涙もぬぐわず、九人の部下、同僚の最後をしっかりと脳裏に刻み込んだ。睡眠薬の空箱があった

ことは見苦しくないようにするため、

睡眠薬を飲んだあと青酸カリを飲んだのでだろう。吉田、渡辺さんがプラグをにぎり、コードをつかっているのをみたとき、その右手の指先に、職務に対する責任感をみたように思った。可香谷さんから五人は恐怖からからだを守るように倒れていたが、十七歳の松橋さんだけが南の窓のそばにいたのはなぜだろう。戦火に追われて逃げる町の人たちをみて、肉親の無事を祈っていたのだろうか。

上田局長はこのように語る。

九人は白っぽい制服にモンペをはいていた。午前三時ごろ就寝することになっており、睡眠中を北の防空監視哨からの電話で起こされたのであろうが、服装はみじんも乱れていなかった。交換台には数発の弾こんががあった。局長らの背後で室内の状況を見ていたソ連軍将校も、ひざまついで動く(哭)する鈴木監督らを見ると、胸で十字をきってめい(瞑)目していた。

自決は、戦闘にまきこまれてものの一時間もたない午前六時半過ぎだったと推定される。真岡の北の泊居郵便局では、その自決寸前までの通話がかわされていた。上田真岡局長は八月末、泊居局で所弘俊局長に会い、当時の状況を次のように聞いている。

ソ連艦艇を幌泊監視哨が発見したと

の第一報は午前五時四十分ちょっと過ぎたころ泊居局にもはいった。その後、北浜町で火災が発生したもようも伝えられており、真岡の状況は交換手からの話の背景になって伝わってくる銃砲の声によって、危険が刻々と迫っていることは泊居にいてもよくわかった。そして、渡辺照さんが「今、みんな自分で決めます」と知らせてきたのは午前六時半ごろだったという。

「死んではいけない。絶対、毒をのんではいけない。生きるんだ、白いものはないか、手ぬぐいでもいい、白い布を入り口に出しておくんだ」

所局長は、受話器をにぎりしめて懸命に叫んだ。相手を説き伏せることのできないもどかしさに、しまいには涙声で同じことばを繰り返した。しかし、ひとときは激しい銃砲声のなかで、やっと、「高石さんはもう死んでしましました。交換台にも弾丸が飛んできました。もうどうにもなりません。局長さん、みなさん、さようなら。長くお世話になりました。おたっしやで。さようなら」

という渡辺さんの声が聞きとれた。所局長と居合わせた交換手たちは泣いた。だれかが、真岡と渡辺さんの名を呼んだが、二度と応答はなかった、という。

死亡したのは九人。川島交換手は、連絡のため外に出て、あの銃砲火でもどることができず、志賀交換手は反対番だったが、非常の際、職場に駆けつけることになっていたため、弾丸のなかを職場に走り、高石交換手らと死を共にした。ほかに一人、服毒量が少なくて助かった人がいた。

九人の遺体は上田局長らがリヤカーで、三回に分けて病院に運び、負傷して入院している人たちに手伝ってもらい、穴を掘り、遺髪を切って仮埋葬した。九人の死についてはソ連軍も畏敬し、遺族が火葬したいと申し出ても許さず、遺族がそろったときようやく許可、十二月十日に発掘された。可香谷あさは「娘シゲは沢田さん、高石さんと一緒に穴に埋葬されていた。薬のためかノドもとが腐っている人もいたがほとんどきれいで、沢田さんなどはまだお人形のようなだった。シゲは手ぬぐいを首にかけ制服の胸にネームが入っていた。くつをはいた上からひもではいてあり、モンペは二枚重ねてはいていた。極度の緊張と恐怖のなかで恥かしめをうけまいと身づくろいしたのでしょうか」と語る。遺体は肉親がリヤカーで火葬場に運び火葬した。

真岡郵便局では二十日の戦闘に巻き

込まれて殉職したのは九人の交換手にとどまらなかった。札幌郵便局四十二刊「通信従業員殉職録」によると電信係の守山弘、阿部宏は危険が迫ったため構内の防空壕に隠れたが、ソ連兵の投げ込んだ手榴弾によって死亡した。この壕には斎藤佐之吉もいて同時に死亡した。また、電話回線の応急修理に当たっていた技手、篠原藤熊(所属、豊

原電気通信工事局)工務員、長谷川清(同)通信手、八木末治(真岡局)は銃撃で死亡、局雑務手、佐々木栄吉、同木村猛二は構内で砲弾のため死亡、集配員守屋義智も死んでいる。殉職録にはないが、電信受付、折笠雅子は非常呼集で自宅を出てまもなく銃弾をあびて死んでおり、真岡局の殉職者は十人へのぼる。

編者付言、虚講の南京事件に染脳されてしまった従輩よ、ソ連軍の残虐非道はまぎれもない事実だ、よく覚えておくれがいい。

会報35号でお知らせした特攻散華展について、写真集とビデオの購入をおすすめします。写真集は千円、ビデオは二千円、何れも送料込み、後払。

申込先は

277-0871 柏市松葉町6-41-11 中江仁

電話 | 31-2156